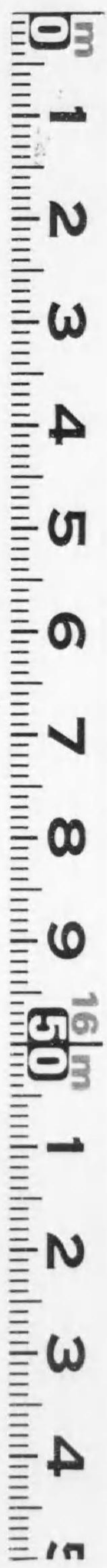


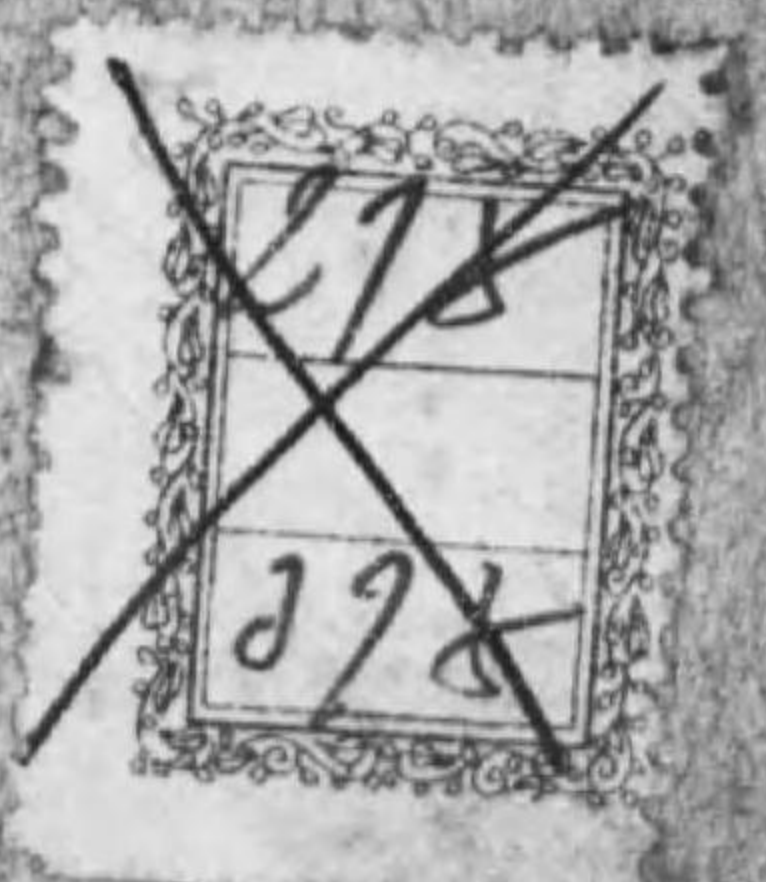
始



安部清藏著

新撰基督傳

警醒社書店



特

符110
105



安
部
清
藏



序言

新約聖書中の基督傳たる、四福音書は、著者自身の筆に爲りたるものに非ずして、何れも、或一定の目的を以て、既存の原文から、抜粹編纂したものである。此意味を以て、予は現代の人々に、讀ますべき、基督傳を、四福音書中の原文から、抜粹編纂したのである。歴史的批評の結果によれば、基督傳の材料として、眞に信頼し得るものは、十個の記事にも足りないと言ふ事である。併し此十個の記事さへも、恐らくは何かの疑問なしに、採用さるゝ事は、出来ないかも知れぬ。都ての書を信すれば、書なきに若かずと云ふ事があるが、反對に都ての書を疑へば、信すべき事は、

一ツもないやうになるかも知れぬ。天下恐らく、一として眞の富岳を描いたものはあるまい。併し描いたもの、眞偽如何に關せず、富岳の存在は事實である。近代畫家の、口吻を學ぶ譯ではないが、傳記の描寫は、其主人公の本質を、さながらに讀者の前に、現出せしむれば、ソレで宜いのである。材料の歴史的價值も、左ることながら、寫眞ばかりでは、本統の繪は書けない。傳說的材料の中にドウしても捨てる事の出來ない、眞價の存するものがある。予の編纂が、果して適當なる排置となつて居るか、ドウかは疑問であるが、無趣味なる寫眞ブックでない事だけは、事實である。淺薄なる近代文で、一家言の排列を事とした、基督傳よりは、耶蘇基督てふ大人格を學ぶ上に於て、此

方が寧ろ大なる利益がある事を信ずる所から、敢て刊行する事としたのである。刊行に際し、敬友星島二郎君の手を煩はす事尠少なからざりしを、附記して、爰に感謝の意を表します。

大正四年七月

御殿場東山第廿五回夏期學校開校地にて富岳を眺めつゝ

安部清藏識す

新撰基督傳

目次

第	第	第	第	第	第	第	第	第	第
八	七	六	五	四	三	二	一	一	一
章	章	章	章	章	章	章	章	章	章
山上の垂訓(其三)	山上の垂訓(其二)	山上の垂訓(其一)	サマリアの女	弟子の選定	耶蘇の受洗と試練	前驅者バプテスマのヨハネ	緒言		
二七	二一	一三	八	六	四	一	一		
									頁

第九章	播種の比譬……………	三〇
第十章	十二使徒の派遣……………	三五
第十一章	五千人を飼ひ水上を歩む……………	四〇
第十二章	生命のパン……………	四二
第十三章	誤れる傳説……………	四七
第十四章	ペテロの告白……………	五〇
第十五章	山上の變貌……………	五三
第十六章	天國の偉大……………	五四
第十七章	放蕩兒の比譬……………	五六
第十八章	罪の赦免……………	五九
第十九章	耶蘇ガリラヤを去る……………	六二
第二十章	エルサレム入京の途次……………	六五

第二十一章	エルサレム入城……………	六七
第二十二章	耶蘇とニコデモ……………	六九
第二十三章	ベテスダの池……………	七二
第二十四章	ラザロの復活……………	七五
第二十五章	パリサイ宗及びサドカイ宗……………	八二
第二十六章	耶蘇の攻勢……………	八六
第二十七章	終末の預言……………	九二
第二十八章	最終審判の警告……………	九七
第二十九章	姦淫をなせる女……………	一〇二
第三十章	善き牧羊者……………	一〇四
第三十一章	反對黨の決議……………	一〇六
第三十二章	最後の晚餐……………	一〇八

第三十三章	最後の慰言	一四
第三十四章	葡萄樹の比譬	一八
第三十五章	仲保の祈禱	二二
第三十六章	ゲツセマネの園	二七
第三十七章	耶蘇捕はる	二九
第三十八章	祭司長の庭	三〇
第三十九章	ペテロの背信	三二
第四十章	ピラトの法廷	三三
第四十一章	ヘロデの審判	三六
第四十二章	再びピラトの法廷	三七
第四十三章	ユダの最後	三九
第四十四章	十字架	三九

第四十五章	埋葬	四三
第四十六章	墓地の守護	四四
第四十七章	復活	四五
第四十八章	マリア主を觀る	四六
第四十九章	番卒の報告	四八
第五十章	エマオの途上	四八
第五十一章	使徒に現はる	五一
第五十二章	テベリヤ湖畔	五三
第五十三章	昇天	五七

新撰基督傳目次終

二神に道は
 一に道は
 して二に
 万物を加
 へて三に
 さなる一
 此道は基
 督の本此
 なり。本は
 命に生し
 て世界に
 類の光な
 り。

新撰基督傳

(四福音書抜粹)

第一章 緒言

太初に道(ことば)あり、道は神と偕ごにあり、道は即ち神なり、
 この道は太初はじめに神と偕ごに在りき。萬物これに由て造ら
 る、造られたる者に一として之これに由らで造られしは無し。
 之これに生命いのちあり、此生命は人の光なり。光は暗黒くらに照り出
 で、暗黒は之これを曉さらざりき。

第二章 前驅者バプテスマのヨハネ

羅馬皇帝テベリオ、カイザル在位の十五年、ポンテオピラ
 トはユダヤの君侯となり、ヘロデはガリラヤの君侯とな
 れり。其兄弟ピリポはイツリア及びテラコニテの君侯

マブテス
とばし洗
マとばし
禮に譯し
水に洗ふ
身を洗ふ
式なり

イザヤは
舊約時代
の豫言者
なり

蝮の末裔
とばし人
の未孫と
云ふ意

アブラハ
ムはユダ
ヤ人の先
祖にて有
徳有信の
人

聖靈とは
神の靈化
禾場(う
ば)

となり、ルサニアはアビレネの君侯と爲れり。エルサレ
ム神殿にては、アンナスとカヤバ祭司の長たりき。此時
に當りザカリヤの子ヨハネ野に居りて神の命を受け、ヨ
ルダンの地方に來り、罪の赦を得させんが爲に、悔改のバ
プテスマを宣傳せり。此ヨハネは身に駱駝の毛衣を着、
腰に皮の帶をつかね、蝗蟲と野蜜を食物とせり。曰く天
國は近けり悔改めよ。是は「主の道を備へ、その路程も直
くせよ」と野に呼ぶ人の聲あり」と、預言者イザヤが言ひし
人なり。
千時エルサレム及びユダヤまたヨルダンの四方より人
々出て、ヨハネに就き、己が罪を告白し、ヨルダンにて彼よ
りバプテスマを授けられたり。バプテスマを受けんと

てパリサイ及びサドカイの人々多く來れるを見て、彼等
に曰ひけるは、蝮の末裔よ、誰が爾曹に神の審判の將に來
らんとするを告げしや。爾曹須らく悔改に符ふ果を結
べよ。爾曹が先祖にアブラハムありと思ふ勿れ。我れ
敢て言ふ、神は能くこの石をも、アブラハムの子となし給
ふなり。今や斧は樹の根に置かれたり、凡て善果を結ば
ざる樹は斫られて、火に投げ入れらるべし。我は爾曹を
悔改めさせんとて、水を以てバプテスマを授く、然れど我
より後に來る者あり、彼は我に勝りて能力あり、我は其履
を提るにも足らず。彼は聖靈と火をもてバプテスマを
授けん。手には箕を持ちて、其禾場を淨め、麥を歛めて倉
にいれ、糠は熄えざる火にて燃くべし。

耶蘇の生
長地はガ
リヤの村
ナザレに
ナリ。父の
名ヨセフ
はヨセフ
母はマリ
ア。三十一
歳の時に
工の許に
なせり。

第三章 耶蘇の受洗と試練

斯時イエス、ヨハネにバプテスマを受けんとて、ガリラヤよりヨルダンに來り給ふ。ヨハネ辭みて曰けるは、我は爾よりバプテスマを受くべき者なるに、爾反つて我に來る乎。イエス答へけるは、暫く許せ。如此すべての義しき事は、我儕盡す可きなり。此に於てヨハネ彼に許せり。イエス、バプテスマを受けて水より上れるとき、天忽ち之が爲めにひらけ、神の靈の如く降りて、其上に來るを見る。又天より聲ありて、此は我心に適ふわが愛子なりと云へり。斯くて後イエスは聖靈に導かれ、惡魔に試みられん爲めに野に往けり。四十日四十夜食ふ事をせず、後うゑたり。

試むる者
は惡魔
は試むる者
録されたる
りとは舊
約書に録
されたる
也。聖京は
エルサレ
ム。

サタンは
惡魔

試むる者彼に來りて曰ひけるは、爾もし神の子ならば、命じて此石をパンとせよ、イエス答へけるは、人はパンのみにて生くるものに非ず、唯神の口より出づる凡の言に因る。と録されたり。是に於て惡魔かれを聖京に携へゆき、宮殿の頂上に立せて曰ひけるは、爾もし神の子ならば己が身を下へ投げよ、そはなんぢが爲めに神其使等に命せん、彼等手にて支へ爾が足の石に觸れざるやうすべしと録されたり。イエス彼に曰ひけるは、主たる爾の神を試むべからずと亦録せり。惡魔また彼を高き山に携へゆき、世界の諸國と、その榮華とを見せて、爾もし俯仰して我を拜せば、此等を悉くなんぢに與ふべしと曰ふ。イエス彼に曰ひけるは、サタンよ退け、主たる爾の神を拜し、惟之

神の人の罪を贖ふに代りて
神の人の罪を贖ふに代りて
神の人の罪を贖ふに代りて
神の人の罪を贖ふに代りて

れにのみ事ふべしと録されたり。終に悪魔かれを離れ、
天使來りて事ふ。

第四章 弟子の選定

ヨハネ二人の弟子と偕に立ち、イエスの行くを見て、神の
羔を觀よと曰ふ。如此いへるを弟子聞きて、イエスに従
ひ往けり。イエス彼等の從へるを顧みて、爾曹はなにを
求むるやと、彼等に問ふ。答へてラビ何處に宿るやと曰
ふ。(ラビとは師と云ふ義なり)イエス彼等に來り觀よと
曰ひたまひければ、遂に往きて、其宿り給ふ處を見て、此日
ともに宿れり。時は晝の四時ごろなりき。ヨハネの曰
ひし言を聞きて、イエスに従へる二人の者の其一人は、シ
モン、ペテロの兄弟アンデレなり。かれ先づ其兄弟シモ

ケバと云ふ
義と云ふ
律法と云ふ
モ一と云ふ
書と云ふ
猶太教の
創言者
豫言者
今師の宗
教は

ンに遇ひて曰ひけるは、我儕メツシヤに遇へり。(メツシ
ヤとはキリストなり)即ち彼を携へ往きしに、イエス視
て、之れに曰ひけるは、爾はヨナの子シモンなり、爾はケバ
と稱へらるべし。(ケバはペテロと同義なり)翌日イエス
ガリラヤに往かんとして、ピリポにあひ、我に従へと曰へ
り。ピリポはアンデレとペテロの住める、ベツサイダと
云へる邑の人なり。ピリポ、ナタナエルに遇ひて曰ひけ
るは、我儕律法の中にモーゼが載せたる所、又預言者等の
記し、所の者に遇へり。即ちヨセフの子ナザレのイエ
スなり。ナタナエル曰ひけるは、ナザレより何の善者い
でん乎。ピリポ彼に曰ひけるには、來りて觀よ。イエス、
ナタナエルの己が所に來るを見、かれを指して曰けるは、

イスラエルの別名

人の子に
イエスの事

サマリア
はユダヤ

眞のイスラエルの人にして、其心虚偽なき者ぞ。ナタナ
エル、イエスに曰ひけるは、如何にして我を知りたまふ乎。
イエス之に答へて曰ひけるは、ピリポが爾を招かざる先
に、無花果樹の下に爾の居るを見たり。ナタナエル答へ
て曰ひけるは、ラビ爾は神の子なり。爾はイスラエルの
王なり。イエス答へて曰ひけるは、爾が無花果樹の下に
居るを我が見しと言へるに因りて、爾信するか、此よりも
大なる事を爾みるべし。又いひけるは、我まことに實に
爾曹に告げん、天ひらけ神の使等、人の子の上に入り下り
するを見ん。

第五章 サマリアの女

イエス旅して、サマリアのスカルと云へる邑に至れり。

とが中
の地に
の血を
の故を
の交際
絶たれ
る所な
ヤコブ
ヨセフ
イスラエ
ル人の祖
先人の祖
ヤコブ
ヨセフ
元祖の名

此邑はヤコブ其子ヨセフに予へし地に近し。此所にヤ
コブの井あり。イエス行路の疲勞にて、此井の傍に坐せ
り。時に晝の十二時ごろなりき。一人のサマリアの婦、
水を汲まんとして來りければ、イエス其婦に向ひて、我に飲
ませよと曰ふ。そは弟子たち食物を買はんために邑へ
往きて在らざりし故なり。サマリアの婦いひけるは、爾
はユダヤ人なるに、何んぞサマリアの婦なる我に飲むこ
とを求むるや。此はユダヤ人とサマリアの人とは交際
を爲さざる習いなれば也。イエス答へて曰ひけるは、爾
もし神の賜と、我に飲せよといふ者の誰なるを知らば、爾
反つて我に求めん、然らば活ける水を爾に予ふべし。婦
イエスに曰ひけるは、主よ釣瓶なく井も亦深し、爾何處よ

り汲みて、其活ける水を有するか。この井は我儕の先祖
ヤコブの予へし所なり、彼も其子も亦畜類までも、皆これ
を飲みたり、爾は彼よりも勝れし者ならん乎。イエス答
へて曰ひけるは、凡て此水を飲むものはまた渴かん、然れ
ど我あたふる水を飲む者は、限りなくかわく事なし。且
つわが予ふる水は、其中にて泉となり、湧き出で、永生に
至るべし。婦いひけるは、主よ我が渴く事なく、亦この處
に水を汲みに來らぬ爲め、其水を我に予へよ。イエス曰
ひけるは、爾ゆきて夫を呼び來れ。婦こたへて曰ひける
は、我に夫なし。イエス曰ひけるは、夫なしと言へるは、理
なり。そはなんぢ曩きに五人の夫ありて、今ある者は爾
の夫に非ず、爾の言ひしは眞なり。婦いひけるは、主よ我

此山と
ゲリと
山に
コブの
の近
のゆ
のなる
昔此上
サマリ
人の神
あり殿

メツシヤ
の事は
救主

なんぢを預言者と知れり。我儕の先祖は此山にて拜し
、に、爾曹は拜すべきもの所はエルサレムなりと曰ふ。
イエス曰ひけるは、婦よ我を信せよ。唯に此山のみ非
ず、亦エルサレム而已にも非ずして、爾曹父を拜すべき時
きたらん。爾曹の拜すべき者を爾曹は知らず、我儕の拜
する者を我儕は知る、そは救はユダヤ人より出るが故な
り。眞の拜する者、靈と眞を以て、父を拜する時きたらん、
今その時になれり。夫れ父は是の如く拜する者を求め
給ふ。神は靈なれば拜するものも靈と眞とを以て之れ
を拜すべき也。婦いひけるは、キリストと稱ふるメツシ
ヤの來らん事を知る、かれ來らん時、凡ての事を我儕に告
げん。イエス曰ひけるは、爾と語る所の我は其れなり。

時に弟子きたりて彼の婦と語れるを奇みけれども、其何を求むるや、又なに故これと語れるか問へる者も無かりき。婦その水瓶を遺して邑にゆき、人々に曰ひけるは、我すべて行ひし事を我に告げし人を來りて觀よ。此はキリストならず乎。是に於て人々邑を出て、イエスの所に來る。その間に弟子かれに請ひて、ラビ食し給へと曰ひければ、イエス彼等に曰ひけるは、我に爾曹の知らざる食物あり。弟子たがひに曰ひけるは、食物を彼に贈りしものは誰なる乎。イエス彼等に曰ひけるは、我を遣はし、者の旨に隨ひ、其工を成し畢る是わが糧なり。かの婦わが爲し、凡の事を彼われに告げしと證せし言に因りて、其邑のサマリア人おほくイエスを信せり。是

に於てサマリアの人イエスの所に来り、偕に留まり給はん事を願ひしかば、イエス此所に二日留まれり。彼の言に因りて信せし者、前よりも多かりき。かれら婦に曰ひけるは、今なんちの言ひし事に因りて信するに非ず。我儕みづから聞きて、此は誠に世の救主と知りたれば也。

第六章 山上の垂訓(其一)

イエス、ガリラヤを遍ねく巡り、其會堂にて教をなし、天國の福音を宣傳し、且つ民の中なる諸の病もろくの煩ひを醫しぬ。その聲名あまねくスリヤに播かりしかば、人々すべての患へる者、萬の病、また痛み惱める者、あるひは鬼に憑かれたるもの、癩癩癩癩に罹れる者を、彼に携ひ來りければ、之を醫やせり。ガリラヤとデカポリス、エルサ

所謂九福
の教に
入るも
天國に
資する
格條の
件なり。

レム、ユダヤ、ヨルダンの地方より、多くの人々きたり従ふ。
イエス多くの人を見て、山に登り坐し給ひければ、弟子等
も其下に來れり。
イエス口を啓きて彼等に教へ曰ひけるは、
心の貧しきものは福なり天國は即ち其人のものなれば
也。
哀しむものは福なり其人は慰めを得べければ也。
柔和なるものは福なり其人は地を嗣ぐ事を得べければ
也。
饑え渴く如く義を慕ふものは福なり其人は飽く事を得
べければ也。
矜恤するものは福なり其人は矜恤を得べければ也。

心の清きものは福なり其人は神を見ることを得べけれ
ば也。
平和を求むるものは福なり其人は神の子と稱へらる可
ければ也。
義しきことの爲めに責めらるゝものは福なり天國は即
ち其人のものなれば也。
我ために人なんぢらを罵りまた責めいつはりて様々の
悪言を放たん其時は爾曹福なり喜び樂しめ天に於て爾
曹の報賞多ければ也。そは爾曹より前の預言者をも如
此せめたりき。
爾曹は地の鹽なり鹽もし其味を失はゞ何を以てか故の
味に復さん後は用なし外に棄てられて人に踐まるゝ而

已。爾曹は世の光なり。山の上に建てられたる城は隠るゝ
ことを得ず。燈を燃して升の下におく者なし。燭臺を置
きて家にある凡てのものを照さん。此の如く人々の前
に爾曹の光を輝かせ然れば人々なんぢらの善行を見て
天に在す爾曹の父を榮むべし。
われ律法と預言者を廢る爲めに來れりと思ふ勿れ來り
て之を廢るに非ず成就せん爲めなり。われ誠に爾曹に
告げん天地の盡きざる中に律法の一畫も遂げつく
さずして廢るものなし。是故に人もし誠の微少なる一
を壞り又その如く人に教へなば天國に於て微少なるも
のと謂はれん。凡そ之れを行ひ且つ人に教ふる者は天

國に於て大なる者と謂はるべし。我なんぢらに告げん、
學者とパリサイの人の義よりも爾曹の義しきこと勝れ
ずば、必ず天國に入ることを能はじ。
古の人に告げて殺すこと勿れ、殺すものは審判に附せら
れんと言へること有るは爾曹が聞きし所なり。然れど
我なんぢらに告げん、凡て故なくして其兄弟を怒る者は
審判に附せられん、又其兄弟を愚者よといふ者は集議所
に引かれ、狂妄者よといふ者は地獄の火に墮さるべし。
此の故に爾もし供物を携へて壇に往きたる時、かしこに
て兄弟に恨まるゝことあるを憶ひ起さば、其供物を壇の
前に置き、まづ往きて爾の兄弟と和らぎ、後ち來りて爾の
供物を献げよ。爾を訴ふる者と偕に途にある時は、やく

和らげよ、恐らくは訴ふるもの爾を審判官に付し審判官
また爾を下吏に付し、遂に爾は獄に入れられん。我まこ
とに爾曹に告げん、分厘までも償はざれば必ず其所を出
る事能はざる也。
古の人に告げて姦淫すること勿れと言へることあるは、
爾曹が聞きし所なり、然れど我爾曹に告げん、凡そ婦を見
て色情を起すものは、中心己に姦淫したる也。もし右の
眼なんちを罪に陥さば、抉き出して之れを棄てよ、之は
五體の一を失ふは、全身を地獄に投げ入れらるゝよりは
勝れり。もし右の手なんちを罪に陥さば、之れを斷りて
棄てよ。そは五體の一を失ふは、全身を地獄に投げ入れ
らるゝよりは勝れり。また曰へることあり、凡そ人その

妻を出さんとせば之れに離縁状を與ふべしと、然れど我
爾曹に告げん、姦淫の故ならで其妻を出す者は之れに姦
淫なさしむるなり、又出されたる婦を娶る者も姦淫を行
ふなり。
また古の人に告げて、偽りの誓言を立つること勿れ、なん
ぢ誓ふ所は必ず主に對して遂行すべしと言へることあ
るは、爾曹の聞きし所なり。然れど我なんちらに告げん、
更に誓ふこと勿れ、天を指して誓ふ勿れ、是れ神の聖座な
れば也。地を指して誓ふ勿れ、是れ神の足凳なれば也。エ
ルサレムを指して誓ふこと勿れ、是れ大君の都城なれば
也。爾の首を指して誓ふ勿れ、そは一すぢの毛髪だに、白
くし黒くすること能はざれば也。爾曹たゞ然り々々否

な々々といへ、此より過るは惡より出づるなり。
目にて目を償ひ、齒にて齒を償へと言へることあるは爾
曹が聞きし所なり、然れど我なんぢらに告げん。惡に敵
する勿れ、人なんぢの右の頬を撃たば、亦ほかの頬をも轉
して之れに向けよ。爾を訟へて裏衣を取らんとする者
には外服をも亦とらせよ。人なんぢに一里の公役を強
ひなば、之れと偕に二里ゆけ、爾に求むるものには予へ借
らんとする者は退くる勿れ。
爾の隣を愛して其敵を憾むべしと言へること有るは爾
曹が聞きし所なり。然れど我なんぢらに告げん、爾曹の
敵を愛し、爾曹を誚ふ者を祝し、爾曹を憎む者を善視し、虐
遇迫害を加ふるもの、爲めに祈禱せよ。如此するは天

に在す爾曹の父の子とならん爲めなり。夫れ天の父は
其日を善者にも惡者にも照し、雨を義しき者にも義しか
らざるものにも降らせ給へり。爾曹おのれを愛する者
を愛するは何の報賞かあらん、税吏も然かせざらんや。
安否を兄弟にのみ問ふは人より何の過れたる事かあら
ん、税吏も然かせざらんや。此故に天に在す爾曹の父の
完全なるが如く、爾曹も完全なるべし。

第七章 山上の垂訓(其二)

なんぢら人に見せん爲めに、其義しきを人の前に行ふこ
とを慎めよ。もし然らずば、天に在す爾曹の父より報賞
を得じ。
此故に施濟を行ふとき人のあがめを得ん爲めに會堂や

異邦人と
眞の神と
知らざ
る外國人

路上にて、偽善者の如く喇叭を己が前に吹かしむる勿れ、
我まことに爾曹に告げん、彼等は既にその報賞を得たり、
なんぢ施濟をなす時右の手の爲すことを左の手に知ら
する勿れ、如此するは其施濟の隠れんが爲めなり、然らば
隠れたるに鑒たまふ、爾の父は明顯に報ひたまふべし。
なんぢ祈る時に、偽善者の如くする勿れ、彼等は人に見ら
れんが爲めに、會堂や街衢の隅に立ちて祈ることを好む。
われ誠に爾曹に告げん、彼等は既にその報賞を得たり。
なんぢ祈る時は、隱密なる室に入り、戸を閉ぢて、隱微なる
所に在す、爾の父に祈れ、然らば隱微なる所に鑒たまふ、爾
の父は明かに報ひたまふべし。爾曹祈る時は、異邦人の
如く、重複語を言ふなかれ、彼等は言おほきを以て聽かれ

主の祈と
稱せらる
もの

アメンと
確かに
然りと
義の

んと意へり。是故に彼等に效ふこと勿れ。爾曹の父は
求めざる先に其必用物を知りたまへば也。然らば爾曹
かく祈るべし。

「天に在します我儕の父よ、願くば御名をあがめさせ給
へ、御國をきたらせ給へ、御心の天に成るごとく地にも
成させ給へ。我儕の日用の糧を今日も與へ給へ。我
儕に罪過あるものを我儕がゆるす如く我儕の罪過を
も免し給へ。我儕を試練に遇せず、惡より救ひ出し給
へ。國と權能と榮光は窮りなく、爾の有なれば也、アメ
ン」
爾曹もし人の罪を免さば、天に在ます爾曹の父も亦な
んぢ等を免し給はん、然れどもし人の罪を免さずば、爾曹

第三條
斷食

首に膏を
ぬり面を
洗ふは日
常の行爲

第四條
天國の貯
蓄

の父も爾曹の罪を免し給はざるべし。
なんぢら斷食するとき僞善者の如き憂き容をする勿れ。
彼等は人に見せん爲めに顔色を損ふ。我まことに爾曹
に告げん、彼等は已に其報賞を得たり。なんぢ斷食する
時は首に膏をぬり面を洗へ。如此するは爾の斷食人に
見えすして隠微なる所に在す爾の父に現はれん爲めな
り。然らば隠れたる所に視たまふ爾の父は明かに報ひ
たまふべし。
蠹くひ銹くさり盗うがちて竊む所の地に財を蓄ふるこ
と勿れ。蠹くひ銹くさり盗穿ちて竊まざる所の天に財
を蓄ふべし、蓋なんぢらの財の在るところに心も亦ある
可ければ也。

第五條
神中心主
義

身の光は目なり若なんぢの目瞭かならば全身も亦明か
なるべし。若しなんぢの目あしからば全身暗かるべし。
此故に爾の中の光もし暗からば、其暗きこと如何に大な
らすや。人は二人の主に事ふること能はず、そはこれを
惡みかれを愛しみ、是を親しみ彼を疎むべければ也。爾
曹神と財に兼ね事ふること能はず。此故に我なんぢら
に告げん、生命のため何を食ひ何を飲み、また身體のた
めに何を衣んと思ひ煩ふこと勿れ。生命は糧より優り、
身體は衣よりも優れるものならずや。なんぢら天空の
鳥を見よ、蒔くことなく刈ること爲す、倉に蓄ふること
なし。然るに爾曹の天の父は之れを養ひ給へり。爾曹
之よりも大に勝る、者ならず乎、爾曹のうち誰れか能く

ソロモンは猶太人の王に榮華の極たる人盡し

思ひ煩ひて其生命を寸陰も延べ得んや。また何故に衣のこを思ひわづらふや。野の百合花は如何にして長つかを思へ。勞めず紡むがざる也。われ爾曹に告げん。ソロモンの榮華の極の時だにも其装ひこの花の一に及ばざりき。神は今日野に在りて明日爐に投げ入れらる。草をも如此よそはせ給へば、況して爾曹をや。嗚呼信仰うすき者よ。然ば何を食ひ何を飲みなにを衣んとて思ひ煩ふ勿れ。此れみな異邦人の求むる者なり。爾曹の天の父は凡て此等のもの、無くてならぬことを知り給へり。爾曹まづ神の國と其義しきを求めよ。然らば此等のものは皆なんぢらに加へらるべし。此故に明日の事を憂慮すること勿れ明日は明日の事を思ひわづ

結論を悟り過改を悟り悔改を悟り断行せよ

らへ、一日の苦勞は一日にて足れり。

第八章 山上の垂訓(其三)

人を議するこれ勿れ、恐らくは爾曹もまた議せられん。爾曹が人を議する如く己も議せらるべし。爾曹が人を量る如く己も量らるべし。なんぢ兄弟の目にある塵を視て、己が目にある梁木を知らざるは何んぞや。己の目に梁木のあるに如何で兄弟にむかひて爾が目にある塵を我に取らせよと曰ふことを得んや。偽善者よ先づ己の目より梁木をとれ、然らば兄弟の目より塵を取り得るや。明かに見ゆべし。犬に聖き物を與ふる勿れ。また豚の前に爾曹の眞珠を投げ與ふる勿れ。恐らくは足にて之れを踐み、ふりかへ

りて爾曹を噬みやぶらん。
求めよ然らば與へられ尋ねよ然ばあひ門を叩けよ然ば
開かるゝことを得ん。蓋すべて求むるものは得尋ぬる
ものはあひ門を叩く者は開かる可れば也。爾曹のうち
誰か其子パンを求めんに石を予へんや。また魚を求め
んに蛇を予へんや。然らば爾曹惡しき者ながら善き賜
を其子に與ふるを知る。まして天に在す爾曹の父は求
むるものに善物を予へざらんや。此故に凡て人にせら
れんと欲ふことは爾曹また人にも其ごとく爲よ。是れ
律法と預言者なる也。
窄き門より入れよ沈淪に至る路は濶く其門は大なり此
より入るもの多し生命に至る路は窄く其門は小さし其

路を得るもの稀なり。
偽の預言者を警戒せよ。彼等は綿羊の姿にて爾曹に來
れども内は猛き狼なり。是れ其果に由りて知るべし。
誰れか荆棘より葡萄をとり、蒺藜より無花果を採ること
をせん。凡て善樹は善果を結び、惡樹は惡果を結ぶ。善
樹は惡果を結ばず、惡樹は善果を結ぶこと能はざる也。
凡て善果を結ばざる樹は伐られて火に投げ入れらる。
此故に其果によりて之を知るべし。
我を呼びて主よ主よと曰ふもの盡く天國に入るに非ず。
唯これに入る者は我天に在す父の旨に隨ふ者のみなり。
其日われに語りて主よ主よ主の名に由りて教へ主の名
によりて鬼をおひ主の名によりて多くの異なる行をな

しゝに非ずやと云ふもの多からん。其時かれらに告げ、われ嘗て爾曹を知らず、悪をなす者よ、我を離れ去れと曰はん。是故に凡て我この言を聽きて行ふものを、磐の上に家を建てたる智者に譬へん、雨ふり大水いで風ふきて其家を撞てども倒ることなし、是れ磐を基礎と爲したれば也。凡て我この言を聽きて行はざるものは、砂の上に家を建てたる愚かなる人に譬へん、雨ふり大水いで風ふきて其家を撞てば、終には倒れて其覆滅大なり。イエス此等の言を語り終りたまへるとき、集りたる人々その教を駭きあへり。そは學者の如くならず、權威を有てる者の如く教へ給へば也。

第九章 播種の比譬

海邊
ガリ
ラヤ
湖邊

イエス家を出で、海邊に坐せしに、多くの人々彼に集まり來りければ、イエスは舟に登りて坐し、凡の人々は岸に立てり。イエス譬を以て、種々の言を人々に語りぬ。種まくもの播きに出でしが、播けるとき路の傍に遺ちし種あり。空の鳥きたりて啄み盡せり。また土うすき磽地に遺ちし種あり、直ちに萌へ出でたれど、日の出でしとき灼かれしかば、根なきが故に枯れたり。また棘の中に遺ちし種あり、棘そだちて之を蔽げり。また沃壤に遺ちし種あり、實を結べる。或は百倍、或は六十倍、或は三十倍せり。耳ありて聽ゆる者は聽くべし。弟子來りて彼に曰ひけるは、何故に譬を以て彼等に語り給ふや。答へて曰ひけるは、爾曹には天國の奧義を知ることを与へた

まへど、彼等には予へ給はざる也。それ有るものは予へ
られて尙ほ餘りあり、有ぬものはその有るものをも奪ら
るゝ也。彼等は視ても見ず、聽きても聽かず、悟らざるが
故に、我譬を以て彼等に語れり。イザヤの預言に、爾曹は
聽けども悟らず、視れども見ず、蓋この民目にて視、耳にて
き、心にて悟り、改めて我に醫されんことを恐れ、その心
を頑くし、耳を蔽ひ、目を閉ぢたりと云ひしに相應せり。
然れど爾曹の目は見、爾曹の耳は聞くが故に福なり。わ
れ誠に爾曹に告げん、多くの預言者と義人は、爾曹が見る
ところを見んとしたりしが、見ることを得ず、爾曹が聞く
所を聞かんとしたりしが、聞くことを得ざりき。故に爾
曹種蒔きの譬を聽け。

天國の教を聞きて悟らざれば、惡鬼來りて其心に播か
れたる種を奪ふ。是れ路の傍に播きたる種なり。磽
地に播かれたる種は、是れ教を聽きて速かに喜び受け
ども、己れに根なれば暫時のみ、教のためには患難ある
ひは責めらるゝ事の起る時は、忽ち道に躓くもの也。
また棘の中に播かれたる種は、是れ教を聽けども、此世
の思ひ煩ひと、貨財の惑に教を蔽はれて、實らざるもの
也。沃壤に播かれたる種は、是れ教を聽きて悟り、實を
結ぶこと。或は百倍、あるひは六十倍、あるひは三十倍す
るもの也。
また譬を彼等に示して曰ひけるは。
天國は人畑に善き種を播くに似たり。人々の寝ねた

る間に、其敵きたりて、麥の中に稗子を播きて去れり。苗はえ出で、實りたる時、稗子も現はれたり。主人の僕來りて曰ひけるは、主よ畑には美種を播かざりしが、如何にして稗子ある乎。僕に曰ひけるは、敵人これを如何にして。僕主人に曰ひけるは、然らば我儕ゆきて之れを抜きあつむるは宜きか。否おそらくは爾曹稗子を抜きあつめんとて、麥をも共に抜くべし。收穫時まで二ながら長ておけ、我かりいれの時、まづ稗子を抜きあつめて焚かん爲めに、之れを束ね、麥をば我が倉に收めよと言はん。

また譬を彼等に示して言ひけるは、天國は芥種の如し、人これを取りて畑に播けば、萬の種

よりは小さけれど、長ちては他の草より大にして、空の鳥來り、其枝に宿るほどの樹となる也。

第十章 十二使徒の派遣

イエス其十二弟子を遣はさんとして命じ曰ひけるは、異邦の途に往くなかれ。又サマリア人の邑にも入る勿れ。惟イスラエルの迷へる羊に往け。往きて天國近きに在りと宣べ傳へよ。病のものを醫し、癩病を潔くし、死にたるものを甦らせ、鬼を逐ひ出すことをせよ。爾曹價なしに受けたれば、亦價なしに施すべし。爾曹金または銀または錢を貯へ帶ぶる勿れ。旅囊、二の裏衣、履、杖も亦然り。そは勞作するもの、其食物を得るは當然の事なれば也。凡そ邑里に至らば、其中の善意

者を訪ねて、出づるまで其處に留まれ。人の家に入らば其平安を問へ。その家もし平安を得べき者ならば、爾曹の願ふ平安は其家に至らん。若し平安を得べからざる者ならば、爾曹の願ふ平安は爾曹に歸るべし。もし爾曹を受けず、爾曹の言を聽かざるものあらば、其家または其邑を去る時、足の塵をはらへ。われ誠に爾曹に告げん。審判の日に到らば、ソドム、ゴモラの地は、此邑よりも却つて易からん。われ爾曹を遣はすは、羊を狼の中に入るゝが如し。故に蛇の如く、智く、鴿の如く、馴良なれ。慎みて人々に心せよ。そは人々なんぢらを集議所に付し、又其會堂にて鞭つべければなり。又わが故に由りて侯伯及び王

の前に曳かるべし。是れ彼等と異邦人に辨證を立つる機會たらん爲めなり。人爾曹をわたさば、如何に何を言はんと思ひ煩ふ勿れ。其とき言ふべきことは爾曹に賜はるべし。是れなんぢら自ら言ふにあらず、爾曹の父の靈その衷に在りて言ふ也。兄弟は兄弟を死に付し、子は兩親を訴へ、且つ之れを殺さしむべし。又爾曹わが名の爲めに、凡ての人に憎まれん、然れど終りまで忍ぶものは救はるべし。この邑にて人なんぢらを責めなば、他の邑に逃れよ。我まことに爾曹に告げん。爾曹イスマエルの諸邑を巡り盡さざる間に、人の子は來るべし。弟子は師より優らず、僕は主人より優らざる也。弟子は其師の如く、僕は其主人の如くならば足

りぬべし。若し人主人を呼びて、ベルゼルと云はゞ、
況して其家のものをや。是故に彼等を懼るゝ勿れ。
そは掩はれて露はれざる者なく、隠れて知れざるもの
無ければ也。われ暗中に於て爾曹に告げしことを明
かに述べよ。耳をつけて聽きしことを屋上に宣べ播
めよ。身を殺して魂を殺すこと能はざる者を懼るゝ
勿れ。惟なんちら魂と身とを地獄に滅ぼし得る者を
懼れよ。二羽の雀は一錢にて賣るにあらずや、然るに
爾曹の父の許なくば、其一羽も地に隕つること有らじ。
爾曹の頭の髪また皆かぞへらる。故に懼るゝ勿れ。
爾曹は多くの雀よりも優れり。然れば凡そ人の前に、
我を識ると言はん者を、我も亦天に在す父の前に、之れ

を識ると言はん、人の前に我を識らずと言はん者を、我
も亦天に在す父の前に之れを識らずと言ふべし。
地に秦平を出さん爲めに我來れりと思ふ勿れ。秦平
を出さんとに非ず、刃を出さん爲めに來れり。夫れわ
が來るは人を其父に背かせ、女を其母に背かせ、媳を其
姑に背かせんが爲めなり。人の敵は其家の者なるべ
し。我よりも父母を愛しむ者は、我に協はざる者なり。
我よりも子女を愛しむ者は、我に協はざるもの也。そ
の十字架を取りて我に従はざる者も、我に協はざるも
の也。その生命を得るものは、之れを失ひ、我ために生
命を失ふものは、之れを得べし。爾曹を接くる者は、我
を接くる也。また我を接くる者は、我を遣はし、者を

接くる也。預言者なるを以て、その預言者を接る者は、預言者の報賞をうけ、義人なるを以てその義人を接る者は義人の報賞を受く、わが弟子なるを以て、小さき一人の者に、冷かなる水一杯にても飲まする者は、誠に爾曹に告げん、必ず其報賞を失はじ。

第十一章

五千人を飼ひ水上を歩む

此後イエス、ガリラヤの湖すなはちテベリヤの湖の前岸へ濟りしに、許多の人々これに隨ふ。蓋彼が病みし者に行ひし休徴を見しが故なり。イエス山に上り、弟子と偕に其處に坐せり。時にユダヤ人の踰越の節に邇し、イエスを擧げて、多くの人の來れるを見て、ピリポに曰ひけるは、何處よりパンを買ひて、彼等に食はしむ可きか。自

ら其爲さんとする事を知れば、彼を試みんが爲めに、如此いへる也。ピリポ答へけるは、銀二百のパンも、人ごとに少しつゝ予へて、なほ足らざるべし。弟子の一人、即ちシモン、ペテロの兄弟アンデレ、イエスに曰ひけるは、此に一人の童子あり、大麥のパン五と、小さき魚二を有てり、然れどこの許多の人に如何すべきぞ。イエス曰ひけるは、人を坐らせよ。其所に多くの草あり、約そ五千人ほど坐りぬ。イエスパンをとり、祝謝して弟子に予へ、弟子これを坐りし人々に予ふ。又如此くにして小さき魚をも人々の欲に隨ひて、彼等に與へたり。皆飽きたる後、イエス弟子に曰ひけるは、少しも失はざるやうに、其餘りの屑を拾ひ集めよ。彼等が食せし、かの五

の大麥のパンの殘餘の屑を拾ひ集めければ、十二の筐に
盈てり。人々イエスの行し奇跡を見て、此は誠に世に來
るべき預言者なりと曰ふ。是に於てイエス彼等が來り、
己を執りて王に爲さんとするを知り、たゞ獨りにて之れ
を避け、再び山に入りたり。日の暮る頃弟子海に下り
て、舟に登り、カペナウンに向ひて海を濟る、既に暮れけれ
ども、イエス彼等に來らず。大風吹き來りて、海は漸くあ
れいだせり。一里十町ばかり漕ぎ出せる時、イエスの海
を歩み、舟に近づくを見て、弟子等懼れたり。イエス曰ひ
けるは、我なり懼るゝ勿れ、是に於て弟子喜びて彼をうけ、
舟に登せければ、直ちに其行かんとする所の地に着きぬ。

第十二章 生命のパン

翌日かなたの海岸に立ちし人々、昨日弟子の登りし舟の
外には舟なく、且つイエスは弟子と偕に、舟に登らず、弟子
のみ往けるを知る。此時テベリヤより外の舟きたり、主の
祈りて人々にパンを食はし、所の近くに着けり。人々
イエスの此に在らず、弟子も亦在ざるを見て、彼等も舟に
登り、イエスを尋ねん爲めにカペナウンに至れり。湖の岸
にて彼に遭ひ曰ひけるは、ラビ何時こゝに來り給ひし乎。
イエス答へて曰ひけるは、誠に實に爾曹に告げん、爾曹の
我を尋ぬるは休徴を見し故に非ず、たゞパンを食して飽
きたるが故なり。なんぢら壞つる糧の爲めに勞せずし
て、永生に至る糧すなはち人の子の予る糧の爲めに勞す
べし。蓋父の神かれに印して、證すれば也。是に因りて

人々イエスに曰ひけるは、我儕如何なる事を行はし、神の業に爲るべき乎。イエス答へて曰ひけるは、神の遣はし、者^わを信するは、即ち其業なり。彼等いひけるは、我儕をして爾を信せしむる爲めに、何の休徴を爲して、我儕に視するや。何の業を行ふや。我儕の先祖は、野にてマナを食せり。録して天よりパンを彼等に與へて食はしむとあるが如し。イエス曰ひけるは、誠に實に爾曹に告げん。天よりパンを爾曹に與へし者は、モーゼに非ず、今我父は天より眞のパンをもて爾曹に賜ふ。神のパンは天より降りて、生命を世に賜ふもの也。彼等曰ひけるは、主よ恒に其パンを我儕に與へよ。イエス曰ひけるは、我は生命のパンなり、我に來る者は、餓えず、我を信するものは恒に

渴くことなし。然れど我なんぢらが我を見ても信せざる事を爾曹に告げたりき。凡て父の我に賜ひし者は、我に來らん。我に來るものは、我必ず之れを捨てず。わが天より降りしは、己の意のままを行はん爲めに非ず、我を遣はし、者の意のままを行はん爲めなり。凡て父の我に賜ひしものを、われ一をも失はず。末日に之れを、すは即ち我を遣はし、父の意なり。凡そ子を見て之れを信する者は、永生を得、われ復これを末日に甦らすべし。是れ我を遣はし、者の心なれば也。是に於てユダヤ人等、イエスの我は天より降りしパンなりと言ひしことにつき、譏やきいひけるは、彼が父母は我等の識るところならずや。即ち彼はヨセフの子イエスに非ずや。然るに何

ぞ我は天より降りしと言ふや。イエス答へて曰ひけるは、爾曹たがひに譏やくこと勿れ。我を遣はし、父もし引かざれば、人よく我に來るなし。我に來りし人は、末日に我これを甦らすべし。預言者の書に、人皆教を神に受けんと録されたり。是故に凡て父より聽きて學びし者は我に來る。然れど父を見し者はなし。惟神より來る者のみ之れを見たり。誠に實に我なんぢらに告げん。我を信するものは永生あり。我は生命のパンなり、爾曹の先祖は野にてマナを食ひしかど死ねり。凡て食ふ者をして、死なざらしむる者は、天より降れるパンなり。もし人此パンを食はば、窮りなく生くべし。我あたふるパンは我肉なり。世の生命のために我これを與へん。爰

にユダヤ人たがひに争ひ曰ひけるは、此人いかで其肉を我儕に與へて食はしむる事を得ん乎。イエス曰ひけるは、誠に實に爾曹に告げん、もし人の子の肉を食はず、其血を飲まざれば、爾曹に生命なし。わが肉を食ひ、我血を飲む者は永生あり、我末の日に之れを甦らすべし。夫れわが肉は誠の食物、また我血は誠の飲物なり。わが肉を食ひ、我血を飲む者は我にをり、我も亦彼に居る。生ける父に由りて生くべし。これ天より降れるパンなり。爾曹の先祖が食ひたれど尙ほ死にし、マナの如きものに非ず。此パンを食ふ者は窮りなく生くべし。

第十三章

誤れる傳説

パリサイの人と或學者たち、エルサレムより來りて、イエスの前に集まり、彼の弟子の中に、潔からざる手、即ち洗はざる手にてパンを食するものありしを見て、之れを責めたり。蓋しパリサイの人とユダヤの人々は皆古の傳説を守りて、其手を潔く洗はざれば食せず、市より歸りきたりて洗はざれば亦食せず。此外杯、椀、鍋、および牀を洗ふなど、多端の傳説を受け守れり。是に於てパリサイの人と學者等、イエスに問ひけるは、爾の弟子は何ゆゑ古の人の遺教に遵はずして、洗はざる手を以てパンを食する乎。イエス答へて彼等に曰ひけるは、イザヤは偽善者なる爾曹を指して善く預言せり。其録し、言に、此民は唇にて我を教へども、其心は我に遠かり、人の誠を教となし、徒ら

に我を拜すと曰へり。夫れなんぢらは神の誠を棄てし人の傳説を守れり。即ち鍋、杯を洗ひ、多く如此き事を行ふ。また彼等に曰ひけるは、爾曹は實に己の傳説を守らんとて能くも神の誠を棄るものなり。モーゼ曰ひけるは、爾の父母を敬へ又父あるひは母を罵る者は殺さるべしと。然れど爾曹は曰ふ。もし人父あるひは母に對ひて、爾を養ふべき物は、コルバン即ち供物なりと曰は、父母に事へずとも可しと、而して人の其父母の爲めに何をも行す事を、爾曹許さず、斯くなんぢらは其教ふる所の傳説をもて、神の道を空ふす、又おほく此類の事を行ふ。イエスマた人々を召びて彼等に曰ひけるは、爾曹みな我言を聞きて悟れ。外より人に入るものは人を汚すこと

能はず、然れど人より出づるものは、人を汚すなり、聴ゆる
耳あるものは聴くべし。
イエス人々を離れて室に入りしに、其弟子譬の意を問ひ
ければ、彼等に曰ひけるは、爾曹もなほ悟らざる乎。凡そ
外より人に入るもの、人を汚し能はざる事を知らざる
乎。蓋は其心に入らず、腹に入りて、厠に遺つ。即ち食ふ
所のもの、潔まれり。又曰ひけるは、人より出づるものは
是れ人を汚す。人の心より出づるものは、悪念、姦淫、苟合、
凶殺、盜竊、貪婪、惡慝、詭譎、好色、嫉妬、謗讟、驕傲、狂妄なり。是
等の悪行はみな内より出で、人を汚すもの也。

第十四章 ペテロの告白

イエス、カイザリヤ、ピリピの方に到りし時、其弟子に問ふ

て曰ひけるは、人々は人の子を誰れと言ふや。彼等いひ
けるは、或人はバプテスマのヨハネ、或人はエリヤ、或人は
エレミヤ、また預言者の一人なりと言へり。彼等に言ひ
けるは、爾曹は我を謂ひて誰れとする乎。シモン、ペテロ
答へけるは、爾はキリストにして、活ける神の子なり。
イエス答へて曰ひけるは、ヨナの子シモン、爾は福なり。蓋血
肉なんぢに示せるに非ず、天に在す吾父なり。我また爾
に告げん。爾はペテロなり、我教會を此磐の上に建つべ
し。陰府の門は之れに勝つ可らず。又われ天國の鑰を
爾に予へん、爾が地に於て繫ぐことは、天に於ても繫ぎ、地
に於て釋くことは、天に於ても釋くべし。遂に其弟子を
戒めけるは、我をキリストと人に告ぐることを勿れ。

此時よりイエス其弟子に、己のエルサレムに往きて長老祭司の長、學者等より、多くの苦みを受け、且つ殺され三日目に甦る等爲すべき事を示し始む。ペテロ、イエスを引きとめて、主よ宜からず、此事なんぢに來るまじと曰ひければ、イエス顧みて、ペテロに曰ひたまひけるは、サタンよ我後に退け。爾は我に礙くもの也。夫なんぢは神の事を思はず人の事を想へり。此時イエスその弟子に曰ひけるは、若われに従はんと思ふ者は、己を棄て、十字架を負ひて我に従へ、そは生命を保全せんとする者は之れを失ひ、我ために其生命を失ふ者は之れを得べければ也。もし人全世界を得るとも、其生命を失はば、何んの益あらんや、また人何を以て其生命に易へんや。それ人の子は

父の榮光を以て、その使等と偕に來らん。其時おのの行に由りて報ゆべし。誠に實に爾曹に告げん、人の子その國を以て來るを見るまで、此に立つもの、中に死なざる者あるべし。

節十五章 山上の變貌

六日の後、イエス、ペテロ、ヤコブ、その兄弟ヨハネを伴ひ、人を避けて、高き山に登りたまひしが、彼等の前にて其容貌かはり、其面目の如く輝き、其衣は白く光れり。モーセとエリヤ現はれて、イエスと偕に語りぬ。ペテロ答へてイエスに曰ひけるは、主よ我儕こゝに居るは善し、もし尊旨に適はば、我儕に三の廬を建させたまへ。一は主のため一はモーセのため、一はエリヤの爲めにせん。如此いへ

る時、かゝやける雲彼等を蔽ふ。聲雲より出で、言ひけるは、此は我旨に適ふわが愛子なり。爾曹之れに聴く可し。弟子これを聞きて大におそれ倒れ伏したり。イエス來りて彼等に手をつけ、起きよ懼るゝ勿れと曰ひければ、其目を舉げしに、惟イエスの外一人をも見ざりき。

第十六章 天國の偉大

其とき弟子イエスに來りて曰ひけるは、天國に於て大なる者は誰ぞや。イエス、嬰兒を召び、彼等の中に立て、曰ひけるは、我まことに爾曹に告げん、もし改まりて嬰兒の若くならずば天國に入ることを得じ。然れば凡そ此嬰兒の如く、自ら謙る者は、これ天國に於て大なるものなり。又わが名の爲めに此の如き一人の嬰兒を受るものは我

稚兒に人は
必ず一人は
の天使
ふと稱せ
らる

を受くるなり。然れど我を信する此小子の一人を礙かする者は、磨石をその頸に懸けられて、海の深所に沈められん方、なほ益なるべし。此世は禍ひなる哉、そは礙かする事をすれば也。礙く事は必ず來らん、然れど礙を來らす者は禍ひなる哉。若し爾の手爾の足おのれを礙かさば、伐りて之れを棄てよ。兩手兩足ありて盡きざる火に投げ入れられんよりは、跛または不具にて生命に入るは善き也。若し爾の眼おのれを礙かさば、抜き出して之れを棄てよ。兩眼ありて地獄の火に投げ入れられんよりは、一眼にて生命に入るは善き也。爾曹この小子の一人をも慎みて輕視る勿れ。我なんぢらに告げん。彼等を守る使等は天に在りて、天に在す吾

父は神、
季子は衆、
生父を離、
罪ある衆、
生事。

父の面を常に視れば也。それ人の子は亡びたる者を救はん爲めに來れり。爾曹いかに意ふや。人もし百匹の羊あらんに、其一匹迷はひ、九十九を山に置き、行きて迷ひし一を尋ねざる乎。もし尋ねて之れに遇はひ、我まことに爾曹に告げん、迷はざる九十九の者よりも、尙ほ其一を喜ばん。是の如くこの小子の一人の亡ぶるは天に在す。爾曹が父の尊旨に非ず。

第十七章 放蕩兒の比譬

また曰ひけるは、或人子二人あり、その季子父に曰ひけるは、父よ我が得べき家産を我に分け予へよ。父その産を彼等に分ちたれば、幾日も過ぎるに季子その産を悉く集めて、遠國へ旅行せしが、放蕩にして其所有を皆そこにて

耗せり。悉く耗やしゝとき、大なる饑饉その地に有りて、彼ともしくなり始めければ、往きて其地の一民に身をよせたり。其人豕を牧ふために、彼を野に遣はせり。かれ豕の食する所の豆莢をもて、己が腹を充さんと思ふほどなれど、何をも彼に予ふる人なし。自ら雇みて曰ひけるは、我が父の所には、食物あまれる傭人の許多が有るに、我は飢ゑて死なんとす。起ちて我父に往きて曰はん、父よ我れ天と爾の前に罪を犯したれば、爾の子と稱ふるに足らざる者なり。爾の傭人の一人の如く我をなし給へど。即ち起ちて其父に往けり。尙ほく有りしに、其父かれを見て憫れみ、趨り往き、其頭を抱きて接吻しぬ。子父に曰ひけるは、父よ我天と爾の前に罪を犯したれば、爾の子

と稱ふるに足らざる也。父その僕等に曰ひけるは、いと
も美き服を携ち來りて之れに衣せ、其指に環をはめ、其足
に履をはかせよ。また肥へたる犢を牽き來りて屠れ、我
儕食して樂しまん。是れ我子死にて復た生き、うしなひ
て復た得たれば也とて、彼等と共に樂しみ始む。其兄田
に在りしが、歸りて家に近き、音樂と舞踏の音を聞き、その
僕の一を呼びて、是れ何事ぞやと問へるに、僕曰ひける
は、爾の弟歸りたり、恙なく彼を得たりしに因りて、爾が父
肥へたる犢を屠りたる也。兄いかりて入らず。是故に
其父いで、彼に勸めしかば、父に答へて曰ひけるは、我多
年なんちに事へて、未だ爾の命に背かず、然れども我友と
樂しむ爲めに、羔をも予へし事なし。然るに妓婦の爲め

に、爾の産業を耗したる、此なんぢが子歸れば、之れが爲め
に肥へたる犢を屠れり。父かれに曰ひけるは、子よ、爾は
常に我と共に在り、また我所有物は皆なんぢの物なり。
爾の弟死にて復た生き、うしなひて復た得たるが故に、我
儕喜びて樂しむは當然の事なり。

第十八章 罪の赦免

イエス曰ひけるは、もし兄弟爾に罪を犯さば、その獨りあ
る時に行きて諫めよ。若し爾の言を聽かば、その兄弟を
得べし。もし聽かずば、兩三人の口に由りて證をなし、凡
の言を定めんが爲めに、一人二人を伴ひ往け、もし彼等に
も聽かずば、教會に告げよ、もし教會に聽かずば、之れを異
邦人かつ税吏のごときものとすべし。我まことに爾曹

に告げん爾曹のうち二人のもの地に於て心を合せ、何事
にても求めば、天に在す我父は彼等のために之れを爲し
給ふべし。そは我名の爲めに二三人の集まれる處には、
我も其中に在れば也。
其時ペテロ、イエスに來りて曰ひけるは、主よ幾度まで、我
兄弟の我に罪を犯すを赦すべきか、七次まで乎。イエス
彼に曰ひけるは、爾に七次とは言はじ、七次を七十倍せよ。
是故に天國は王その臣と會計を調べんとするが如し。
調べ始めしとき、千萬金の負債したる者を王に曳き來り
しに、償ひ方なかりければ、之れに命じて其身その妻子と、
あらゆる所有をみな鬻りて償へと曰へり。其臣ひれ伏
して拜して曰ひけるは、請ふわれを寛し給は、皆償ふべ

し。是に於てその臣の主憐みて之れを釋き、其負債を免
じたり。其臣いで、己より銀一百の負債したる友に遇
ひければ、之れを執らへ、喉をとり負債を返せと曰ふ。そ
の友足下に伏して求め曰ひけるは、我を寛し給は、皆償
ふべし。然るに之れを肯はずして往き、其負債を償ふま
で、彼を獄に入れぬ。外の友その爲せる事を見て甚だ哀
み往きて此事を皆其主に告げしかば、主かれを召して曰
ひけるは、悪しき臣よ、爾われに求めしに因りて、我その負
債を悉く免じたり。我なんぢを憐みし如く、爾も亦友を
憐むべきに非ずや。その主怒りて負債をみな償ふまで
彼を獄吏に付せり。若しおの兄弟を赦さずば、我が
天の父も亦なんぢらに此の如く行し給ふべし。

第十九章

耶蘇ガリラヤを去る

イエス此等の事を言ひ畢りしとき、ガリラヤを去りてヨルダンの外、エダヤの境に至りけるに、多くの人々従ひしかば、此處にて彼等を醫し給へり。パリサイの人きたりてイエスを試み曰ひけるは、人なにの故に係らず其妻を出すは宜しからざる乎。答て彼等に曰ひけるは、元始に人を造り給ひしものは、之れを男女に造れり。此故に人は父母を離れて其妻に合ひ、二人のもの一體と爲るなりと云へるを未だ讀まざる乎。然らばや二にも非ず一體なり。神の合せ給へるものは、人これを離すべからず。イエスに曰ひけるは、然らば離縁狀を予へて妻を出せど、モーゼが命せしは何ぞや。彼等に曰ひけるは、モーゼは

爾曹の心の無情なるに因りて、妻を出すを容したる也。

されど元始は如此あらざりき。

我なんぢらに告げん。もし姦淫の故ならで其妻を出し他の婦を娶る者は、姦淫を行ふなり。又いだされたる婦を娶る者も姦淫を行ふ也。弟子等イエスに曰ひけるは、若し人其妻に於て此の如くば娶らざるに若かず。彼等に曰ひけるは、此言は人みな受け納ること能はず、唯賦與せられたる者のみ之れを爲しうべし。之れ母の腹より生來の寺人あり、又人にせられたる寺人あり、又天國の爲めに自らなれる寺人あり、之れを受け納ることを得るものを受け納るべし。一青年きたりて彼に曰ひけるは、善き師よ、我がぎりなき

生命を得んが爲めには、何の善事を行ふべきか。彼に曰ひけるは、何故われを善きと稱ふや、一人の外に善き者はなし。即ち神なり。若し生命に入らんと欲せば、誠を守るべし。彼こたへけるは、何か。イエス曰ひけるは、殺すと母を敬へ、又己の如く爾の隣りを愛すべし。青年彼に曰ひけるは、是れ皆わが幼き時より守れるもの也。何の欠けたる所我にある乎。イエス彼に曰ひけるは、全からん事を欲は、往きて爾が所有物を售りて、貧者に施せ、然れば天に於て財あらん、而して來り我に従へ。青年この言を聞きて憂へ去りぬ。彼の産業おほひなりければ也。イエス其弟子に曰ひけるは、誠に爾曹に告げん、富者の天

國に入る事は、如何に難い哉。富者の神の國に入るよりは、駱駝の針の孔を通るは却つて易し。弟子之れを聞き、甚だ驚き曰ひけるは、然らば誰れか救を得べき乎。イエス彼等を見て曰ひけるは、是れ人には能はざる所なり。然れど神には能はざる所なし。

第二十章 エルサレム入京の途次

イエス、エルサレムに上るとき、途中にて人と離れ、十二弟子を伴ひ、彼等に曰ひけるは、我等エルサレムに上り、人の子は祭司の長と學者等に賣られん。彼等これを死罪に定め、また凌辱を加へ、十字架につけん爲めに、異邦人にわたすべし。又第三日目に甦るべし。其時ゼバイの子等の母、其子と偕にイエスに來り拜して、彼に求むること

ありければ、之れに曰ひけるは、何を欲ふか。イエスに曰ひけるは、此二人の我子を、爾の國に於て、一人は爾の右、一人は爾の左に坐ることを命せよ。イエス答へて曰ひけるは、爾曹は求むる所を知らず、爾曹は我が飲まんとする杯をのみ、又わが受けんとするバプテスマを受け得るや。彼等いひけるは、能くすべし。イエス彼等に曰ひけるは、誠に爾曹は我が杯をのみ、また我うくるバプテスマを受くべし。然れど我が左右に坐ることは、わが與ふべきに非ず、只わが父に備へられたる者は、與へらるべし。十人の弟子之れを聞きて、二人の兄弟を憤れり。イエス彼等を召して曰ひけるは、異邦の領主はその民を主ざり、大人どもは彼等の上に權を操る。これ爾曹が知る所なり。

然れど爾曹の中にては然かすべからず。爾曹のうち大ならんと思ふものは、爾曹は役はるゝ者となるべし。また爾曹のうち首たらんと欲ふ者は、爾曹の僕となるべし。此の如く人の子の來るも人を役ふ爲めに非ず、反つて人に役はれ、又おほくの人に代りて生命を予へ、その贖とならん爲めなり。

第二十一章 エルサレム入城

かれら橄欖山のベテバゲに至り、エルサレムに近ける時、イエス二人の弟子を遣はさんとして、彼等に曰ひけるは、爾曹むかふの村に行け、やがて繋ぎたる驢馬の其子と偕にあるに遇はん。夫れを解きて我に牽き來れ、若し爾曹に何とか云ふものあらば、主の用なりと言へ、さらば直ち

シオン
の女は
エルサ
レムを
指して
云ふ也

ホザナ
の至上
の義者

に之れを遣すべし。預言者の言に、視よ爾の王は柔和にして驢馬すなはち驢馬の子に乗り、なんぢに來るとシオンの女に告げよと。云へるに應せん爲めに、如此なせる也。弟子ゆきてイエスの命せし如くなし、驢馬と其子を牽き來り、己の衣をその上に置きければ、イエスこれに乘れり。衆人おほくは其衣を途に布き、或は樹の枝を伐りて途に布きぬ。かつ前にゆき後に從ふ。人々呼びひけるは、ダビデの裔ホザナよ、主の名によりて來る者は福なり、いと高き處にホザナよ。イエス、エルサレムに至れるとき、都城こぞりて騒ぎたち曰ひけるは、是誰れぞや、衆人いひけるは、此はガリラヤのナザレより出でたる預言者イエスなり。イエス神の殿

に入りて、其中なる凡の賣買する者を逐ひ出し、兩替するもの、案、鳩をうる者の椅子を倒し、彼等に曰ひけるは、我家は祈禱の家と稱へらるべしと録さる。然るに爾曹これを盜賊の巢となせり。替者跛者の人々殿に入りて、イエスに來りければ、之れを醫しぬ。祭司の長と學者たち、其行ひたまへる奇事を見、また兒童輩の殿にて呼はり、ダビデの裔ホザナよと云ふを聞きて怒を含み、イエスに曰ひけるは、彼等が言ふことを聞くや。イエス答へて曰ひけるは、然り、嬰兒乳哺者の口に讚美を備へたりと録されしを未だ讀まざる乎。遂に彼等を離れ、都城を出で、ベタニヤに往き、そこに宿れり。

第二十二章 耶蘇とニコデモ

ユダヤの宰つかさにてニコデモと云へる人あり。かれ夜イエ
スに來りて曰ひけるは、ラビ我儕なんぢは神より來りし
師なりと知る。そは神もし人と偕ならずば、爾が爲せる
この休徴は、人これを行ふ能はざれば也。イエス答へて
曰ひけるは、誠に實に爾に告げん。人もし新たに生れず
ば神の國を見ること能はじ。ニコデモ彼に曰ひけるは、
人はや老いぬれば、如何で復た生るゝ事を得んや。再び
母の腹に入りて生る可けんや。イエス答へけるは、誠に
實に爾に告げん、人は水と靈みたまとに由りて生れざれば神の
國に入ることも能はざる也。肉にくに由りて生るゝものは肉
なり、靈たまに由りて生るゝものは靈なり。我なんぢに新た
に生るべき事を言ひしを奇あやしと爲すなかれ。風は己がま

ゝに吹く、なんぢ其聲を聞けども、何處いづこより來り何處へ往
くを知らず、凡て靈たまに由りて生るゝ者も此の如し。ニコ
デモ答へて、如何で此事あらん乎と曰ふ。イエス答へて
曰ひけるは、爾はイスラエルの師なるに、猶この事を知ら
ざる乎。誠に實に爾に告げん。我儕知りし事をいひ、見
しことを證あかしするに、爾曹は我儕の證を受けず、若しわれ地
の事を言ふに、爾曹信せずば、況して天の事を言はんには
如何で信ずること爲んや。
天より降りて天にをる人の子の外ほかに昇りし者なし。モ
ーゼ野に蛇へびを擧げし如く、人の子も擧げらるべし。凡
て之れを信ずるものに亡ぶること無くして、永生かぎりなきいのちを受
けしめんが爲めなり。それ神は其生みたまへる獨ひとり子

を賜ふほごに世の人を愛し給へり。此は凡て彼を信する者に亡ぶること無くして永生を受けしめんが爲めなり。神の其子を遣し給へるは世を審判せんとに非ず。彼に由りて世を救はんが爲めなり。彼を信する者は審判されず。信せざる者は既に審判されたり。蓋神の生みたまへる獨子の名を信せざるに由る。罪の定まる所以は、光世に來りしに、人其行ひの惡しきに由りて、光を愛せず、反つて暗黒を愛すれば也。凡て惡をなす者は、光を惡み、其行の責められざらんが爲めに光に就かず。眞理を行ふ者は、其行の顯はれんが爲めに光に來る蓋神に遵りて行へば也。

第二十三章 ベテスダの池

エルサレムの羊門の邊りに、へブルの言語にてベテスダといふ池あり。此池に五の廊あり。その中に病者瞽者跛者また衰へたる者など、多く臥し、水の動くを待てり。そは天の使時々池に下りて水を動かすことあり。水の動けるのち先ちて池に入りしものは、何の病によらず癒えたり。三十八年病みたる者一人かしこに在り。イエス彼が臥しをるを見て、其病の久しきを知り、これに曰ひけるは、癒えんことを願ふや。病めるもの答へけるは、主よ水の動けるとき、我を扶けて池に入る、人なし、我入らんとする時は、他の人くだりて我より先に入る。イエス彼に曰ひけるは、起よ床を取り上げて歩め。その人立どころに癒え、すなはち床を取り上げて歩めり。其日

は安息日なりき。ユダヤ人いえし者に曰ひけるは、今日は安息日なれば、爾床を取り上るは宜しからず。彼等に答へけるは、我を癒し、者われに床を取り上げて歩めと言へり。かれら問ひけるは、爾に床を取り上げて歩めと言ひし人は誰なるぞや。癒えしもの其誰なるを知らざりき。蓋かしこに多の人ありし故、イエス避けたれば也。其後イエス殿にて其人に遇ひ言ひけるは、視よ爾すでに癒えたり、復た罪を犯すこと勿れ、恐らくは前に勝る災禍なんぢに罹らん、其人ゆきてユダヤ人に己を癒し、ものはイエスなりと告ぐ。是に於てユダヤ人イエスをもとめて殺さんと謀る。そは彼れが此事を爲せしは、安息日なりければ也。イエス彼等に答へけるは、我父は今に

至るまで働き給ふ、我もまた働くなり。此に因りてユダヤ人いよ、イエスを殺さんと謀る。そは安息日を犯すのみならず、神を己が父といひ、己を神と齊しくすれば也。是故にイエス彼等に答へて曰ひけるは、誠に實に爾曹に告げん、子は父の行ふ事を見て行ふの外は、何事をも行ふこと能はず。そはすべて父の行ふ事を、子も亦行へばなり。父は子を愛し、凡て己の行ふ所の事を彼に示す。爾曹をして奇ましめん爲めに、かの事等より更に大なる事を彼に示さん。そは父の死にし者を甦らせ、生かしむるが如く、子も己の意に従ひて人を生かしむべし。

第二十四章 ラザロの復活

茲に病者あり、ラザロと云ひてベタニヤ村の人なり。べ

タニヤはマリヤと其姉マルタの住める村なり。此病めるラザロは彼等が兄弟なり。是故にその姉妹イエスの所に、主の愛する者病めりと言ひ遣はせり。イエスこれを聞きて曰ひけるは、此は死ぬる病にあらず、神の榮のためなり。神の子をして之れに因りて榮を得しめんが爲めなり。夫れマルタと其妹およびラザロはイエスの愛する所の者なり。是故にイエスその病めるを聞きて、此家に二日といまり、其後弟子に曰ひけるは、我儕またユダヤに往くべし。弟子いひけるは、ラビユダヤ人は近來も石をもて爾を撃たんとせしに、また彼所に行き給ふか。イエス答へけるは、一日の中に十二時あるに非ずや、人もし日中あるかば、躓くことなし、そは此世の光を見るに因

りてなり。また人もし夜あるかば、躓くべし。蓋光その人に無きが故なり。イエス如此いひて後、弟子にいひけるは、我儕の友ラザロ寝ねたり、我かれを醒さん爲めに往くべし。弟子いひけるは、主よ、彼もし寝ねしならば癒えん。イエス彼の死しを言へるなれど、弟子等は寝ねて臥ることと言へるならんと意へり。是故にイエス明かに彼等に告げて曰ひけるは、ラザロは死ねり、爾曹をして信せしむる爲めに、我かしこに在らざりしを喜ぶ、然れどもいま彼處に往くべし。デドモと稱へるトマス他の弟子等に曰ひけるは、我儕も亦ゆきて彼と偕に死ぬべし。イエス至りてラザロ既に墓に葬られて四日なるを知れり。ペタニヤはエルサレムに近し。其距ること約を廿七丁

なり。多くのユダヤ人マルタとマリアを其兄弟の事に
因て慰めんとして、既に彼等の所に来りてをれり。マルタは
イエス來り給へりと聞きて、之れを出迎へ、マリアはなほ
室に坐せり。マルタ、イエスに曰ひけるは、主よ此に在せ
しならば、我兄弟は死なざりしものを、然りながら假令今
にても爾が神に求むる所のものは、神なんちに賜ふと知
る。イエス曰ひけるは、爾の兄弟は甦るべし。マルタ、イ
エスに曰ひけるは、彼が末日の甦るべき時に甦らん事を
知るなり。イエス彼に曰ひけるは、我は復活なり、生命な
り、我を信するものは死るとも生くべし。凡て生きて我
を信する者は永遠に死ぬることなし、爾これを信するや。
彼イエスに曰ひけるは、主よ然り我なんぢは世に臨るべ

きキリスト神の子なりと信ず。如此いひ竟りて潜かに
其妹マリアをよび、師きたりて爾を呼び給へりと曰ふ。
マリア之れを聞きて、急ぎ起ちて、イエスの所に往けり。
イエス未だ村に入らず、なほマルタの迎へし所にをれり。
マリアを慰めて、偕に室に在りしユダヤ人、マリアが急ぎ
起き出るを見て、彼は墓に往きて、哭くならんと曰ひつゝ、
彼に隨へり。マリア、イエスの所に來り、彼を見て、其足下
に伏しいひけるは、主よ若しこゝに在せしならば、我兄弟
は死ざりしものを。イエス、マリアの哭くと、彼と偕に來
りしユダヤ人の泣くを見て、心をいたたましめ、身ぶるひて
曰ひけるは、爾曹何處に彼を置きしや。彼等いひけるは
主よ來りて觀たまへ。イエス、涙を流したまへり。是に

於てユダヤ人言ひけるは、見よ如何ばかり彼を愛する者ぞ。その中なる人曰ひけるは、瞽者の目を啓きたる此人にして、彼を死なざらしむる能はざりしか。イエスマた心を働まして墓に至る。墓は洞にて其口の所に石を置けり。イエス曰ひけるは、石を去れよ。死しもの、兄弟マルタ曰ひけるは、主よ彼ははや臭し、死にてより已に四日を経たり。イエス彼に曰ひけるは、爾もし信せば神の榮を見るべし、と我なんちに言ひしに非ずや。遂に其石を死にし者を置きたる所より取り除けたり。イエスを仰ぎて曰ひけるは、父よ已に我に聴けり、我これを爾に謝す。我なんちが常に我に聴くことを知る、しかるに我がかく言ふは、傍に立てる人をして爾の我を遣はし、こ

とを信せしめんとて也。如此いひて大聲に呼び言ひけるは、ラザロよ出でよ。死者布にて手足を縛られ、面は手拭にて裹まれて出づ。イエス彼等に曰ひけるは、彼を釋きて歩ましめよ。マリアと偕に來りしユダヤ人イエスの行し事を見て多く彼を信せり。然れども其中にパリサイの人に行きて、イエスの行し事を告げしものあり。是に於て祭司の長たちとパリサイの人と議員を召集して曰ひけるは、我儕如何にすべき乎。この人多くの奇跡を行すなり。もし彼を此まゝ棄て置かば、人みな彼を信せん、然らば 로마の人きたりて我儕の地をも民をも奪ふべし。其中の一人にて此歳の祭司の長なるカヤパと云へる者、彼等に曰ひけるは、爾曹何をも知らず、又民の爲め

に一人死にて舉國ほろびざるは、我儕の益たる事をも思はざる也。此言は己より出でしに非ず、此歳の祭司の長なるにより、イエスの斯民の爲めに死ぬることを預言せるなり。特に斯民の爲めのみならず、散りたる神の子民等をも一に集めんが爲なり。偕てこの日よりして、彼等イエスを殺さんと共に議る。

第廿五章

パリサイ宗及びサドカイ宗

此時パリサイの人いで、如何にしてか彼を言ひ誤らせんと相謀り、その弟子とヘロデの黨人を遣はして、云はせけるは、師よ爾は眞なる者なり。眞を以て神の道を教ふ。また誰れにも偏せざることを我儕は知る、そは貌に由りて人を取らざれば也。然らば貢をカイザルに納むるは

善きや悪きや。爾いかに意ふか、我儕に告げよ。イエス其惡を知りて曰ひけるは、偽善者よ何んぞ我を試むるや。貢の銀貨を我に見せよ。彼等デナリ一をイエスに持ち來りしに、之れに曰ひけるは、此像と記號は誰れなるか。答へてカイザル也といふ。是に於てイエス彼等に曰ひけるは、然らばカイザルの物はカイザルに歸へし、また神の物は神に歸すべし。彼等之れをき、奇としてイエスを去りゆけり。復活なしと言ひなせる、サドカイの人此日イエスに來り問ふて曰ひけるは、師よモーゼの云へるに、人もし子なくして死なば、兄弟其妻を娶りて子をうみ、兄弟の後を嗣がしむべしと。茲に我儕の中に兄弟七人ありしが、兄娶

りて死に子なきが故に其妻を弟に遺れり。其二其三その七まで皆然す。後ち婦も遂に死にたり。甦る時は、此女七人の中誰れの妻となるべき乎。是れ皆彼を娶りしものなれば也。イエス答へて彼等に曰ひけるは、爾曹聖書をも神の能力をも知らざるに由りて誤まれり。それ甦るときは娶らず嫁かず、天にある神の使等の如し。死にしものゝ甦ることには、爾曹に神の告げ給ひし言に我はアブラハムの神イサクの神ヤコブの神なりとあるを、未だ讀まざる乎。そも、神は死にしものゝ神にあらす、生けるものゝ神なり。人々これを聞きて其訓を驚けり。

イエス、サドカイの人をして、口を塞がしめたりと聞き、バ

リサイの人一處に集まりけるが、その中なる一人の教法師、イエスを試みん爲めに問ふて曰ひけるは、師よ律法のうち何れの誠が大なる。イエス答へて曰ひけるは、爾心を盡し精神を盡し意を盡して爾の神を愛すべし。是れ第一にして大なる誠なり。第二も亦これに同じ、己の如く爾の隣を愛すべし。凡ての律法と預言者は此二の誠に因れり。

パリサイの人の集まれる時、イエス彼等に問ふて曰ひけるは、爾曹キリストについて如何に思ふや。これ誰れの子なる乎。彼等イエスに曰ひけるは、ダビデの裔なり。彼等に曰ひけるは、然らばダビデ靈に感じて何故これを主と稱へし乎。ダビデ言ふ、主わが主に曰ひけるは、我な

佩經(ふ)は四小に
角(かく)なるは
さ(さ)き札(せ)に
て(て)き者(しや)
記(き)額(がく)に
も(も)び付(つ)く
也(や)結(むす)る

んちの敵を爾の足登となすまで、我が右に坐すべしと。
然らばダビデ已に之れを主と稱へたれば、如何でその子
敢て又問ふ者なかりき。此日より

第廿六章 耶蘇の攻勢

其時イエス人々と弟子とに告げて曰ひけるは、學者とパ
リサイの人は、モーゼの位に坐す、故に彼等が爾曹に言ふ
ところを守りて行ふべし。然れど彼等が行ふ所を爲す
こと勿れ。そはかれらは言ふのみにして行はざれば也。
また彼等は重くかつ負ひがたき荷を括りて人の肩に負
はせ、己は一の指をもて之れを動かすことすら好まず。
彼等の行は、凡て人に見られんが爲めにする也。その佩

經を幅ひろくし、其衣の裾を大にし、また菴席の上座會堂
の高座、市上の挨拶人々よりラビ、ラビ、と稱へられんこと
を好む。爾曹はラビの稱を受くる勿れ。そは爾曹の師
は一人すなはちキリストなり。爾曹は皆兄弟なり。ま
た地にある者を教父と稱ふるなかれ、爾曹の教父は一人
すなはち天に在す者なり。また導師の稱を受くる勿れ、
そはなんぢらの導師は一人すなはちキリストなり。爾
曹のうち大なる者は爾曹の僕となるべし。凡そ自己を
高ふする者は卑くせられ、自己を卑くする者は高くせら
れん。
噫、なんぢら禍なる哉、偽善なる學者とパリサイの人よ、
そはなんぢら天國を人の前に閉ぢて自ら入らず、且つい

らんとする者の入るをも許さる也。噫なんぢら禍な
る哉、偽善なる學者とパリサイの人よ。そはなんぢら
婦の家を呑みいつはりて長き祈をなす、之れに由りて爾
曹最も重き審判を受くべき也。あゝ禍なる哉、偽善なる
學者とパリサイの人よ。そはなんぢら偏く海陸を歴巡
り一人をも己が宗旨に引入れんとす、既に引入るれば、之
れを爾曹よりも倍したる地獄の子と爲せり。噫なんぢ
ら禍なる哉、誓者なる導者よ。爾曹はいふ、人もし殿を指
して誓はい事なし、殿の金を指して誓はい背くべからず
と、愚かにして誓なるものよ、金と金を聖からしむる殿と
は孰れが尊き。又いふ人もし祭の壇を指して誓はい事
なし、其上の供物を指して誓はい背く可らずと、愚にして

誓なる者よ、供物と供物を聖からしむる祭の壇とは孰れ
が尊き。それ祭の壇を指して誓ふ者は、祭の壇および上
の凡てのものを指して誓ふなり。また殿を指して誓ふ
ものは、殿および其中に在す者を指して誓ふ也。また天
を指して誓ふものは、神の寶座および其上に座する者
を指して誓ふ也。噫なんぢら禍なる哉、偽善なる學者と
パリサイの人よ。そは爾曹薄荷、茴香、馬芹の十分の一を
取り納めて、律法の最も重き義と仁と信とを廢つ、これ行
ふ可きもの也、かれも亦廢つべからざる者なり。誓なる
導者よ、爾曹は蠅を漉し出して駱駝を呑むもの也。あゝ
禍なる哉、偽善なる學者とパリサイの人よ、爾曹杯と盤の
外を潔くして、内は貪慾と淫欲とに充たせり、誓者なるバ

リサイの人よ、爾曹まづ杯と盤の内を潔くせよ、然らば其
外も亦きよまるべし。
噫、なんぢら禍なる哉、偽善なる學者とパリサイの人よ、爾
曹は白く塗りたる墓に似たり、外は美しく見ゆれども内
は骸骨と諸の汚穢にて充つ、此の如く爾曹もまた外は義
しく人に見ゆれども、内は偽善と不法にて充つ。噫、なん
ぢら禍なる哉、偽善なる學者とパリサイの人よ、爾曹預言
者の墓をたて、義人の碑を飾れり、又いふ我儕もし先祖の
時にあらば、預言者の血を流すことに與せざりしを、然
らむ、爾曹は預言者を殺し、蛇虺の類よ、爾曹いかに地獄の
刑罰を免かれんや。是故に我爾曹に預言者と智者と學

者とを遺さん、或は之れを殺し、又十字架に懸け、或は其
會堂にて之れを鞭ち、或は邑より邑に逐ひ苦しめん、そは
義なるアベルの血より殿と祭の壇の間にて、爾曹が殺し
、バラキアの子、ザカリアの血に至るまで、地に流したる
義人の血は、凡て爾曹に報ひ來らんが爲めなり。われ誠
に實に爾曹に告げん、此事皆此世に報ひ來るべし。噫、エ
ルサレムよ、エルサレムよ、預言者を殺し、爾に遣はさる、
者を石にて撃つものよ、母雞の雛を翼の下に集むる如く、
我なんぢの赤子を集めんとせしこと、幾次ぞや、然れども
爾曹は好まざりき。視よ、爾曹の家は、荒地となりて遺さ
れん。われ爾曹に告げん、主の名に託りて來る者は、福な
りと、爾曹の云はんと、き至るまでは、今より我を見ざるべ

し。

第廿七章 終末の預言

イエス殿より出でければ、其弟子すゝみて、殿の結構を彼に見せんとしたりしに、イエス彼等に曰ひけるは、爾曹すべて此等を見ざるか、我まことを爾曹に告げん、此處に一の石も、石の上に壊れずしては遺らじ。イエス橄欖山に坐し給へるとき、弟子ひそかに來りて曰ひけるは、何の時のこと有るや。又爾の來る兆と、世の末の兆は如何なるぞや。我儕に告げたまへ。イエス答へて彼等に曰ひけるは、爾曹人に欺かれざるやう慎しめよ。そはおほくの人がわが名を冒しきたり、我はキリストなりと云ひて、多くの人を欺くべし。又なんぢら戦と戦の風聲をきかん、

然れど慎みて懼るゝ勿れ、此等の事は皆ある可きなり。然れど末期は未だ至らず、民おこりて民をせめ、國は國をせめ、饑饉疫病、地震ところどころにあるならん。是みな禍の始めなり。其とき人なんぢらを患難に付し、爾曹を殺すべし。又爾曹我名の爲めに萬民に憎まれん、此とき多くのもの礙きかつ互に付し、互に憾むべし。また預言者おほく起りて、多くの人を欺かん。また不法みつるに因りて、多の人の愛情ひやゝかに爲るべし。然れど終りまで忍ぶものは救はるゝとを得ん。また天國の此福音を萬民に證しせん爲めに、普く天下に宣べ傳へられん、然るのち末期いたる所の殘暴にして憎むべきもの聖處によりて言はれたる所の殘暴にして憎むべきもの聖處に立つを

見ばよむ讀者ものよく思ふべし、其時ユダヤに在る者は山に遁れ
よ。屋上やのうへに在るものは、其家のものを取らんとて下る勿
れ、田に在る者は其衣を取らんとて歸る勿れ、其日には孕はら
める者と乳を飲ます婦をんなは禍わざはひなる哉。爾曹冬または安やす
息いき日に逃にぐることを免かれん爲めに祈いのれ。其時大なる
患難なやみあり、此の如き患難は世の始めより今に至るまで有
らざりき。又後にも有らじ。若しその日を少なくせら
れずば、一人だに救はるゝ者なからん、然れど選ばれたる
者の爲めに其日は少なくせらるべし。其時もしキリス
ト此處こゝにあり、彼處あそこにありと、爾曹にいふ者あるとも信ず
る勿れ、そは僞いつはりキリスト、僞預言者たち起りて、大なる休徵しるし
と異能ふしぎなるわざを行ひ、選ばれたる者をも欺あざむくことを得ば之れを

欺あざむくべければ也。われ預あらかしめ之れを告ぐ、若キリスト野
に在りといふ者あるとも出づる勿れ、室に在りど云ふも
の有りとも信ずる勿れ。そは電光いなづまの東より出で、西に
まで閃ひらめくが如く、人の子も來るべければ也。それ屍かばねのあ
る所には驚おどろあつまらん。此等の日の患難なやみの後のちに
日は晦くく、月は光を失ひ、星ほしは空よりおち、天の勢いきほひ震ふるふべ
し。其とき人の子の兆しるし、天に現あらはる、また地上ちのうへにある諸族やから
は哭なげき哀あはしむ、且つ人の子の權威けんいと大なる榮光えいこうをもて、天
の雲くもに乗り來るを見ん。又使等つかたを遣つかし、籐つばの大なる聲こゑを
出さしめて、天の此極こゝより彼極あそこまで、四方より其選えらばれし
者を集むべし。
夫なんちら無花果樹いちじくに由りて、譬たとへを學まなべ、其枝えだすでに柔やはらか

にして、葉萌めば、夏の近きを知る、此の如く爾曹も凡て此等の事を見れば、時ちかく門口に至るを知れ、われ誠に爾曹に告げん、此等の事ごとく、成るまで此民は癩せざるべし。天地は癩せん、然れど我言は癩せじ、その日その時を知るものはわが父のみ、天の使者も誰れも知るものなし。ノアの時の如く、人の子の來るも亦然らん。それ、洪水の前、ノア函舟にいる日までは、人々飲食嫁娶なごして、洪水の來り悉く之れを滅すまで知らざりき、此の如く人の子も亦きたらん、其とき二人田に在らん、一人は取られ一人は遺さるべし。二人の婦曰磨き居らん、一人は取られ一人は遺さるべし。是故に爾曹の主、いづれの時きたるかを知らざれば、怠らずして守れ。

第廿八章 最終審判の警告

其とき天國は、燈を執りて新郎を迎へに出づる十人の童女に譬ふべし。その中の五人は智しこく、五人は愚なり。愚かなるものは其燈をとるに油を携へざりしが、智き者は其燈と偕に油を器に携へたり。新郎おそかりければ、皆假寢して眠れり。夜半に叫びて新郎きたりぬ、出で、迎へよと呼ぶ聲ありければ、この童女ども、皆おきて其燈を整へたるに、愚かなるもの智き者に曰ひけるは、我儕の燈熄へんとす、願はくは爾曹の油を我儕に分け予へよ。智きもの答へて曰ひけるは、我儕と爾曹とに恐らくは足るまじ、爾曹賣者に往きて、己が爲めに買へ、かれら買はんとて往きしとき、新郎きたりければ、既に備へたる者は、之れ

と偕に婚筵こんせんに入りしかば門は閉ぢられたり。斯くて後
その外の童女むすめ來りて曰ひけるは、主よ主よ、我儕のために
開きたまへ。答へて我まことに爾曹に告げん、我は爾曹
を知らずと曰へり。然らば怠おこたらずして守れ、爾曹その日
その時を知らざれば也。
また天國は或人の旅行たびだちせんとして、其僕をよび、所有物を
彼等に預くるが如し、各の智慧ちからに従ひて、或者には銀五千、
或者には二千、或者には一千を予へおき、直ちに旅行せり。
五千の銀を受けしものは往きて貿易し、他に五千を得た
り。二千を受けし者も他に二千を得たり。然るに一千
を受けし者は、往きて地を堀り、その主の金を藏せり。程
を経て後、その僕等の主かへりて、彼等と會計せしに、五千の

銀を受けし者、その他に五千の銀を持ち來りて、主よ我に
五千の銀を預けしが、他に五千の銀を儲けたり。と曰ひ
ければ、主かれに曰ひけるは、あゝ善且つ忠なる僕ぞ、爾寡
かなること忠なり、我なんぢらに多きものを督らせん、
爾の主人の歡びに入れよ。二千の銀を受けし者きたり
て、主よ我に一千の銀を預けしが、他に二千の銀を儲けた
り、と曰ひければ、主かれに曰ひけるは、あゝ善かつ忠なる
僕ぞ、爾寡かなること忠なり、我なんぢらに多くのものを
督らせん、爾の主人の歡びに入れよ。また一千の銀を受
けし者きたりて曰ひけるは、主よ爾は嚴しき人にて、播か
ざる處より穫り、ちらさゝる處より斂むることを我は知
る。故に我懼れてゆき、主の一千の銀を地に藏し置けり、

今なんぢ爾の物を得たり。その主こたへて曰ひけるは、
悪しく且つ憎れる僕ぞ、爾わが播かざる處よりかり、散
いる處より斂むるを知るか、然らば我が金を兌換舗に預
け置くべき也。然らば我が歸りたるとき、本と利とを受
くべし。是故に彼の一千の銀を取りて、十千の銀あるも
のに予へよ。之れ有てる者は予へられて尙ほあまりあ
り、有たぬ者は其有てる物をも奪らるゝ也。無益なる僕
を、外の幽暗に逐ひやれ、其所にて哀哭切齒すること有ら
ん。
人の子おのれの榮光をもて、諸の聖使を率ゐ來る時はそ
の榮光の位に坐し、萬國の民をその前に集め、牧羊者の綿
羊と山羊とを別つが如く、彼等を別ち、綿羊をその右に、山

羊を其左に置くべし。斯くて王其右にをる者に云はん、
吾父に恵まるゝ者よ、來りて世の始めより以來、なんぢの
爲めに備へられたる國を嗣げ、そはなんぢらの我が飢へ
し時われに食せ、渴きしとき我に飲ませ、旅せし時われを
宿らせ、裸なりし時われに衣せ、病みしとき我をみまひ、獄
に在りし時我に來れば也。是に於て義者かれに答へて
曰はん、主よ何時なんぢの飢へたるを見て食せ、また渴き
たるに飲まし、乎。何時主の旅したるを見て宿らせ、又
裸なるに衣せしや。何時主の病みまた獄に在るを見て
爾に至りし乎。王答へて彼等に曰はん、我まことに爾
曹に告げん、既に爾曹わが兄弟の最微者の一人に行へる
は、即ち我に行ひしなり。遂にまた左にをる者に曰はん、

罰せらるべき者よ。我を離れて悪魔と其使等の爲めに備へたる、熄へざる火に入れよ。そはなんぢらが我が飢へし時われに食せず、渴きし時我に飲せず、旅せし時われを宿らせず、裸なりし時われに衣せず、病みまた獄にありし時われを顧みざれば也。是に於て彼等また答へて曰はん。主よ何時なんぢの飢へまた渴き旅し又裸、また病みまた獄に在るを見て、主に事へざりしや。其とき王こたへて彼等にいはん、我まことに爾曹に告げん、此最微者は窮りなき刑罰にいはん、即ち我に行はざりしなり、此等の者は窮りなき刑罰にいはん、義者は窮りなき生命に入るべし。

第廿九章 姦淫をなせる女

イエス橄欖山に往けり 夜、あくる頃また聖殿に入り

けるが、民みな彼に來りければ、坐りて彼等を教ふ。爰に姦淫を爲せるとき執へられし婦ありけるが、學者とパリサイの人これをイエスの所に曳き來り、群集の中に置きいひけるは、師よ此婦は姦淫を爲しをる時、其まゝ執へられし者なり。此の如き者を石にて撃ち殺すべしと、モーゼ律法の中に命じたり。汝は如何に言ふや。如此いへるはイエスを試みて、訟の由を引出さんと欲へる也。イエス身を屈ごめ指にて地に畫けり。彼等が切りに問ふによりイエス起ちて之れに曰ひけるは、爾曹のうち罪なきものまづ彼を石にて撃つべしと曰ひ、また身を屈めて地に畫けり。彼等これを聞きて、其良心に責められ、老者をばはじめ少者まで、一々に出で往き、たゞイエス一人のこ

る、婦は會集くわいしゅうの中に立てり。イエス起きて婦に曰ひけるは、婦よ爾を認うたへし者は何處いづこに往ゆきしや。爾の罪を定むるものなき乎。婦いひけるは、主よ誰もなし。イエス彼に曰ひけるは、我も爾の罪を定めず、往きて再び罪を犯す勿れ。

第三十章 善き牧羊者

誠に實に爾曹に告げん。羊の牢やうに入るに門よりせずして他より踰こゆる者は竊賊ねつぞくなり強盜きやうたうなり。門より入る者は其羊の牧者ぼくしやなり。門守は彼の爲めに啓ひらき、羊は其聲を聽く、かれ己の羊の名を呼びて之れを引出す。彼その羊を引出すときに行くなり。羊かれの聲を識りて之れに従ふ。羊は別人べつじんに従はず、反つて避く。そは別人の聲を識

らざれば也。イエス彼等に此譬たとへを言へど、彼等はその語れる所はいかなる意こころかを知らざりき。是故にイエス復たかれらに曰ひけるは、誠に實に爾曹に告げん。我は即ち羊の門なり。凡て我より先に來りし者は、竊賊ねつぞくなり強盜きやうたうなり。羊其聲を聽きかざりき。我は門なり、もし人われより入らば救すくはれ、且つ出入をなして草を得べし。竊賊の來るは盜ぬすまんとし、殺さんとし、滅ほろさんとするの他なし。我きたるは羊をして生いのちを得かつ豊ゆたかならしめん爲めなり。我は善よき牧者ぼくしやなり。善よき牧者ぼくしやは羊の爲めに命を捐すつ。牧者ぼくしやにあらず、己が羊を有もたず、只やどはれて羊を守る者は、狼おおかみの來るを見れば、羊を棄すて、にぐ、狼羊を奪うばひて之れを散らす。雇人やこひびとの逃るは傭やこはれし者なれば、其羊を顧おもは

るに由りて也。我は善牧者にて、己の羊を識る。又己の羊に識らる。父われを識る如く我も父を識る。われ羊の爲めに命を捐てん、我は此牢にあらざる別の羊を有てり。彼等をも引き來らん。彼等わが聲を聽かん。遂に一の群一の牧者となるべし。わが父われを愛す、そはわれ再び命を得んが爲めに、命を捐つるが故なり。我より之れを奪ふ者なし、我自ら之れを捐つる也。我よ捐つるの權能あり、亦よく之れを得るの權能あり、我が父より我この命令を受けたり。

第三十一章 反對黨の決議

さて逾越節の節即ち除酵節の二日前に、祭司の長と學者たち、詭計をもてイエスを執らへ殺さんとし、曰ひけるは祭

の日には爲すべからず、恐らくは民の中に亂起らん。イエス、ベタニヤの癩病人シモンの家にて、食し居たまへる時、ある婦蠟石の器に價貴きナルダの香膏を携來り、其器を破り、イエスの頭に注ぎたり。膏のにはひ徧ねく室内に満てり。その弟子の一人なるイスカリオテのユダ即ちイエスをわたさんとするもの怒を含みいひけるは、此膏を費すは何故ぞや之れを鬻らば三百有餘のデナリを得て、貧しき者に施すことを得んと、此婦を言ひ咎む。イエス曰ひけるは、彼に係る勿れ、何んぞ此婦を惱ますや。我に善事を行へる也。貧者は常に爾曹と偕に在れば、爾曹心に任せて彼等を助くることを得べし。我は恒に爾曹と偕にあらず。此婦は力を盡して作せり。そはあらか

じめ我を葬るため、我身に膏を注ぎしなり。我まことに爾曹に告げん、天の下いづくにても、此福音を宣べ傳へらるゝ處には、此婦の行ししことも、亦其紀念の爲めに言ひ傳へらるべし。さて十二の一人なるイスカリオテのユダ、イエスを賣らんと、祭司の長に往きしに、彼等これを聞きて悦び銀子三十を予へんと約せしかば、ユダはイエスを付さんと機を窺へり。

第卅二章 最後の晩餐

除酵節の首の日、弟子イエスに來り曰ひけるは、我儕すぎこしの食を爾のために何處に備ふべき乎。イエス曰ひけるは、城内にいり某に至りていへ、師いふ我が時近づきければ、我弟子と偕に逾越の節筵を爾が家に行ふべしと、

弟子イエスに命せられし如くして、逾越の食を備ふ。日くるゝ頃イエス十二弟子と偕に席に就く。イエス己の手に父の萬物を賜ひしことゝ、神より來り、神に歸ることゝを知り。晩餐の席を起ちて、上衣をぬぎ、手巾を取りて腰に束ぬ。而して盤に水をいれ、弟子の足を濯ひ、其束ねたる手巾にて拭きはじめ、遂にシモンペテロに及ぶ。ペテロ彼に曰ひけるは、主よ爾わが足を濯ふか。イエス答へて曰ひけるは、我なすことを爾いま知らず、後之れを知るべし。ペテロ彼に曰ひけるは、爾斷じて我足を濯ふべからず。イエス答へけるは、若しわれ爾を濯はずば、爾は我と干渉なし。シモンペテロ彼に曰ひけるは、主よたゞに我足のみならず、手と首をも濯ひ給へ。イエ

★

ス曰ひけるは、濯^あひたる者は、足のほか濯ふに及はず、然して全く潔し、爾曹は潔し、然れど盡くは潔きものに非ず、此はイエス己を賣らんとする者の誰なるを知るゆゑに、悉くは潔き者に非すと曰へる也。彼等の足を濯ひし後、その上衣を取り、また坐りて、彼等に曰ひけるは、我なんぢらに行し、ことを知るか。爾曹われを師と呼びまた主と呼ぶ。なんぢらの言ふところは宜し、われは誠に是れなり。我は爾曹の師また主なるに、尙なんぢらの足を濯ふ。爾曹も亦互に足を濯ふべし。

イエス食する時いひけるは、我まことに爾曹に告げん、爾曹のうち一人われを賣る也。彼等いたく憂へて、各イエスに曰ひけるは、主よ我なる乎。答へて曰ひけるは、我と

僭に手を皿に着くる者は、即ち我を賣る者なり。人の子は己れについて録されたる如く逝かん、然れど人の子を賣る者は禍なる哉、その人生れざりしならば反つて幸なりしならん。イエスの愛する一人の弟子、イエスの胸に倚りてありしが、シモン、ペテロ此は誰れを指して言へるなる乎を問はしめんと、首をもて示せり。イエスの胸に倚りて在りし者、イエスに曰ひけるは、主よ誰なるか、イエス答へけるは、我一撮みの食物に物をつけて予ふる人はそれなりとて、遂に一撮みの食物に物をつけて、シモンの子、イエスカリオテのユダに予ふ。彼が一撮の物を受けし其時、サタン彼に入れり、是に於てイエス彼に曰ひけるは、爾が爲さんとする事は、速かに爲せ。彼に何故如此いひ

しかを偕むしろに在る者ごもの中知るものあらざりき。
或人ユダは金囊かぶくろを識しれる故、イエス彼をして節いほひ蕪ひについで用ふべき物を買はしむるならんか、亦是貧者に施ほどこさしむるならんと意をへり。偕むしろてかれは一撮つかみの食物を受けて直ちに出でたり、時は既に夜なりき。
かれら食する時、イエスパンを取りて之れを祝しゆくし、之れをさき弟子に與へて曰ひけるは、取りて食へ、これは我自身なり。また杯かづきを取りて謝しやうし、彼等に與へて曰ひけるは、爾曹みな此杯より飲め、これ新約しんやくの我血わがちにして罪を赦さん、とて衆おほくの人の爲めに流ながす所のもの也。われ爾曹に告げん、今より後なんちらと偕むしろに、新しきものを吾父の國に飲まん日までは、再び此葡萄ぶどうにて造れる物を飲まじ。小子こご

よ我なほしばらく爾曹と偕むしろにあり。爾曹われを尋たづねん。わが行く所に爾曹は至ること能はじ。前まへに之れをユダヤ人にいふ。今また之れを爾曹に告ぐ。われ新しきいまし誠まことを爾曹に予ふ、即ち爾曹相愛すべしとの是れなり。我なんちらを愛する如く、爾曹も互に相愛すべし。爾曹もし相愛せば、之れに因りて人々爾曹の我弟子なることを知るべし。シモン、ペテロ彼に曰ひけるは、主よいつこへ往き給ふや。イエス彼に答へけるは、我ゆく所へは爾いま従ふこと能はず、後われに従はん。ペテロ彼に曰ひけるは、主よ可故に今爾に従ふこと能はざる乎。我は爾の爲めに我命いのちをも捐てん。イエス彼に答へけるは、爾命を我ために捐つるや。誠に實に爾に告げん。雞にわとりなかざる前

に、爾三度われを識らずと言はん。

第三十三章 最後の慰言

イエス曰ひけるは、

爾曹心に憂ふる勿れ、神を信じ、亦われを信すべし。わが父の家には第宅おほし、然らずば我豫め爾曹に之れを告ぐべき也。我なんぢらの爲に所を備へに往くも、し往きて我なんぢらの爲めに所を備へば、又きたりて爾曹を我に受くべし。我居る所に、爾曹を居らしめんとて也。爾曹わが往く所を知り、また其途を知る。トマス曰ひけるは、

主よ我儕なんぢの往く所を知らず、如何にして其途を知らんや。

イエス彼等に曰ひけるは、

我は途なり真なり生命なり、人もし我に由らざれば、父の所に往くこと能はず、若し爾曹我を識らば、我父をも識るべし。今より爾曹我を識る也。已に爾曹彼を見たり。

ピリポ彼に曰ひけるは、主よ我儕に父を示し給へ、然らば足れり。

イエス彼に曰ひけるは、

ピリポ、我かく久しく爾曹と偕に在りしに、未だ我を識らざる乎。我を見しものは父を見しなり。何んぞ父を我儕に示せと言ふや。われ父にをり父の我に在ることを信せざる乎。われ爾曹に語りし言は、自ら語り

しに非ず、我にをる父その行をなせる也。我は父にをり父われに在ると我つげし言を信せよ。もし信せずば我行事に因りて之れを信すべし。そは我わが父へ往けば也。爾曹すべて我名によりて願ふ所のごとは我すべて之れをなさん。若なんちら我を愛するならば、我誠を守れ。われ父に求めん、父かならず別に慰むるものを爾曹に賜ひて、窮なく爾曹と偕に在らしむべし。此は即ち真理の靈なり。世これを受くること能はず、そはこれを見ず、且知らざるに因る。されど爾曹は之れを識る、そは彼爾曹と偕にあり、かつ爾曹の衷にあればなり。我なんちらを捨て、孤兒とせず、再び爾曹に來らん。暫らくせば世われを見ることなし、然れ

ごも爾曹は我を見る、われ生くれば爾曹も生きん。その日に爾曹われ吾父に在り、なんちら我に在り、われ爾曹に在ることを知るべし。我誠を有ちて之れを守る者は、即ち我を愛するなり。我を愛する者は我父に愛せらる、我も亦これを愛して、彼に自己を示すべし。イスカリオテならざるユダ、彼に曰ひけるは、主よ如何にして自己を我儕に示し、世には示さざる乎。イエス答へて彼等に曰ひけるは、若し人われを愛せば、我言を守らん。且つ我父は之れを愛せん、我儕きたりて彼と偕に住むべし。我を愛せざる者は我言を守らず。爾曹の聞くところの言は、我言に非ず、我を遣はし、父の言なり。われ爾曹と偕に

在りて此等のことを爾曹に語りぬ、わが名によりて父の遣はさんとする訓慰師すなはち聖靈は、凡ての理を爾曹に教へ、亦わがすべて爾曹に言ひし事を爾曹に憶ひ起さしむべし。われ平安を爾曹に遣す、我平安を爾曹に予ふ、我あたふる所は、世の予ふる所の如きに非ず。爾曹心に憂ふる勿れ。又懼るゝ勿れ。我ゆきて復なんぢらに來らんと、我曰ひし言を爾曹さけり、若しわれを愛せば、父に往くと我いへる言を、爾曹喜ぶ可き也。そは我父は我より大なれば也。

第三十四章 葡萄樹の比譬

我は眞の葡萄樹、わが父は農夫なり、我に在りて凡て實を結ばざる枝は、これを剪り除り、すべて實を結ぶ枝は之

れを潔む、そはますく繁く實を結ばしめん爲なり。今なんぢら我曰ひし言によりて潔くなれり。爾曹われに居れ、さらば我また爾曹に居らん。枝もし葡萄樹に連ならざれば、自ら實を結ぶこと能はず、爾曹も我に連らざれば亦此の如くならん。我は葡萄樹、爾曹は其枝なり。人もし我に居り、われ亦かれに居らば、多くの實を結ぶべし、そはもし爾曹われを離るゝ時は、何事をも爲し能はざれば也。人もし我に居らざれば、離れたる枝の如く、外に棄てられて枯るゝ也。人之れを集め火に投げ入れて焚くべし。爾曹もし我に居りまた我いひし言なんぢらに居らば、凡て願ふ所求めに従ひて予へらるべし。爾曹おほくの實を結ばし、我父これに由りて榮をうく、然らば爾曹

わが弟子なり。父の我を愛し給ふ如く、我なんぢらを愛す。爾曹わが愛にをれ。若し爾曹わが誠を守らば、我が愛に居らん。われ我が父の誠を守りて、其愛に居るが如し。我この事を爾曹に語るは、我が喜なんぢらに在りて、爾曹喜びを盈たしめんが爲めなり。我なんぢらを愛する如く、爾曹も亦たがひに愛すべし。是わが誠なり。人の友の爲めに己の命を捐つるは、此より大なる愛はなし。凡て我がなんぢらに命ずる所の事を行は、即ちわが友なり。今より後爾曹を僕と云はず、そは僕は其主のなすことを知らざれば也。われさきに爾曹を友と呼べり。我なんぢらに我が父より聞きし所のことを、悉く告げしに因る。爾曹我を選ばず、我爾曹を選べり。且爾曹

をして往きて實を結ばせ、其實を保たしめんが爲め、また爾曹の凡て我名によりて父に求むる所の者を、彼をして爾曹に賜はらせんが爲めに、我なんぢらを立てたり。爾曹互に愛せんが爲めに、我これを命ず。世もし爾曹を惡むときは、爾曹よりも先に我を惡むと知れ。爾曹もし世のものならば、世は己れのものを受すべし。然れど爾曹は世のものならず。我なんぢらを世より選びたり。之れに因りて世なんぢらを惡む。僕は其主より大ならずと我がなんぢらに曰ひし言を心に記めよ。人もし我を責めば、爾曹をもせめ。もし我言を守らば、爾曹の言をも守るべし。然れど彼等は我を遣はし、者を識らざるに因り、わが名の故を以て、此等のことを爾曹に加ふべし。

我もし來りて語らざりしならば、彼等罪なからん。然れど今は其罪いひらく可きやうなし。我を惡むものは、亦わが父をも惡むなり。我もし他の人の行はざりし事を、彼等の中に行はざりしならば、彼等罪なからん。然れど我と我が父とを已に見かつ之れを惡めり。此の如きは彼等の律法に、故なくして我を惡めりと録し、言に應せんが爲めなり。われ訓慰者を父より遣らん。即ち父より出つる真理の靈なり。其きたる時、わが爲めに證をなすべし。爾曹も亦われと偕に始めより在りしに因りて、證を作すべし。

第三十五章 仲保の祈禱

イエス此言を語り畢りて、天を仰ぎ曰ひけるは。

父よ時いたりぬ。爾の子なんぢの榮を現はさんが爲めに、爾の子の榮を顯はし給へ。これ爾われに賜ひし所の者に、我が永生を予へんが爲め、凡の者を制むる權威を我に賜ひたれば也。永生とは唯獨りの眞神なる爾と、其遣はし、イエスキリストを知る是れなり。我なんぢの榮を世に顯はし、爾の我に委ねし所の行は、我これを成せり。父よ我をして爾と偕に榮を得させ給へ。即ち創世より先に爾と偕にありし榮を得させ給へ。なんぢ世より選びて我に賜ひし人々に我なんぢの名を顯はせり。彼等は爾のものにして、爾これを已に我に賜ふ。彼等復爾の道を守れり。彼等いま爾の我に賜ひしものは、皆爾より出でしと知る。そは我なんぢが我に賜ひし言を彼等に

予へたれば也。彼等是れを受け、また我が爾より出でし事を誠に知り、かつ爾の我を遣はし、事を信じたり。われ彼等のために祈る。わが祈るは世の爲めにあらず、爾の我に賜ひし者の爲めなる耳。これ彼等は爾のものなれば也。凡て我ものは爾のもの、なんぢのものは我がものなり。且つわれ彼等に由りて榮を受く、われ今より世に在らず、彼等は世にをり、我は爾に至る。聖き父よ、爾の我に賜ひしものを爾の名に在らしめ、之れを守りて我儕の如く爾等をも一になし給へ。われ彼等と偕に在りし時、かれらを爾の名に在らしめて、之れを守りたり。爾の我に賜ひし者を、我守りしが、其中一人だに亡びたる者なし。唯沈淪の子ほろびたり。是れ聖書に應はせん爲め

なり。我いま爾に至る。われ世に在りて此事を語れるは、我喜樂を彼等に充たしめん爲めなり。われ爾の道を彼等に授けたり。世は彼等を惡む、そは我が世のものに非らざるが如く、彼等も世のものにあらざれば也。われ爾に彼等を世より取りたまへと祈らず、惟彼等を守りて惡に陥らす勿れと祈る。われ世のものに非ざる如く、彼等も世のものに非ず、爾の眞理をもて彼等を潔め給へ、爾の言は眞理なり。爾われを世に遣はせし如く、我も彼等を世に遣はせり。われ彼等の爲めに自己を潔む、これ眞理に因りて彼等の潔められん爲めなり。我たゞ彼等の爲めにのみ祈らず、彼等の教に因りて我を信する者の爲めにも祈るなり。此はみな一にならん爲めなり。父よ

爾われに在り、われ亦なんぢに在る、かくの如く彼等も我儕にをりて一とならん爲め、かつ世をして爾の我を遣はし、事を信せしめんためなり。爾の我に賜ひし榮を、我かれらに授けたり。此は我儕の一なるが如く、彼等も互に一にならん爲めなり。われ彼等に在り、爾われに在る、そは彼等をして一に全くならしめ、且つ世をして爾の我を遣はし、こと、又なんぢ我を愛する如く、彼等をも愛すること、知らしめん爲めなり。父よ爾の我に賜ひし者の、我がをる所に我も偕に在りて、我が榮すなはち爾が我に賜ひし者を見んことを願ふ。そは世の基を置かざりし先に、爾われを愛したれば也。義しき父よ、世は爾を識らず、我は爾を識る。かれらも爾の我を遣はし、事を

知れり。我なんぢの名を彼等に示せり、復これを示さん。そは爾の我を愛する愛かれらに在り、また我かれらに在らん爲めなり。

第三十六章 ゲツセマネの園

かれら歌を謳ひて後、橄欖山に往けり。其時イエス彼等に曰ひけるは、今夜なんぢら皆われに就て礙かん。そは「われ牧者を撃たば群の綿羊ちらんと録されれば也。」然れど我甦りて後爾曹に先だちガラヤヤに行くべし。其時イエス彼等と偕にゲツセマネといふ處に至りて、弟子等に曰ひけるは、爾曹こゝに居れ、われ彼處に往きて祈らん。ペテロ及びゼベダイの二人の子を携へ、憂ひ哀しみを催し、彼等に曰ひけるは、我心いたく憂ひて死るばか

り也。こゝに待ちて我と偕に目を醒し居れ。少し進み
往きてひれふし祈りいひけるは、吾父よ若しかなは、此
の杯を我より離ち給へ、然れど我心のまゝを成さんとす
るに非ず、聖旨に任せ給へ。而して弟子に來り、其寝ねた
るを見て、ペテロに曰ひけるは、如此一時も我と偕に目を
醒し居ること能はざる乎。惑に入らぬやう目を醒しか
つ祈れ。その靈には願ふなれど肉體よわきなり。再び
ゆきて復いのり曰ひけるは、吾父よ若しわれに此杯を飲
まさで離つこと能はずば、聖旨に任せ給へ。來りて又か
れらの寝ねたるを見る。これ彼等の目疲れたる也。彼
等を離れて又ゆき三度目も同じ言をもて祈れり。遂に
弟子に來りて曰ひけるは、今は寝ねて休め、時は近し、人の

子罪人の手に、わたされん。起きよ我儕往くべし、我をわ
たす者近づきたり。

第三十七章 耶蘇捕はる

如此いへる時、十二人の一人なるユダ、劍と棒とを持ちた
る多の人々と偕に、祭司の長と民の長老の所より來る。
イエスをわたす者彼等にしるしを爲して曰ひけるは、我
が接吻をなす者は夫れなり、之れを執へよ。直ちにイエ
スに來り、ラビ安きかと曰ひて彼に接吻す。イエス彼に
曰ひけるは、友よ何の爲めに來るや。遂に彼等すゝみ來
り、手をイエスにかけて執へぬ。イエスと偕にありし者
の一人、手をのべ劍を抜きて祭司の長の僕を撃ち、その耳
を削ぎおとせり。イエス彼に曰ひけるは、爾の劍を故の

處に收めよ。凡て劔をとる者は劔にて亡ぶべし。我いま十二軍餘の天使を吾父に請ふて受くること能はずと爾曹おもふ乎。もし然かせば、如此あるべき事を録し、聖書に如何で應せん乎。

此時イエス人々に曰ひけるは、劔と棒とを持ちて盜賊を執ふるが如くして、我を執へに来る乎。われ日々爾曹と偕に殿に坐して誨へしに、爾曹われを執へざりき。然れど此の如くなるは皆預言者の録したる所に應せん爲めなり。遂に弟子等みなイエスを離れて逃げ去りぬ。

第三十八章 祭司長の庭

イエスを執へたるものは、是れを曳きて學者と長老の集まれる所の、祭司の長カヤバにつれ行く。ペテロ遠く離れ

てイエスに従ひ、祭司の長の庭にまで至り、その結局を見んとて内にいり、僕と偕に坐せり。祭司の長等および長老、すべての議員ともにイエスを殺さんとして、妄證を求めむれども得ず。多くの妄りの證據人きたれども亦えず。後また偽りの證者二人きたりて云ひけるは、この人曩きに言へることあり、我よく神の殿を毀ちて三日の内に之れを建つべしと。祭司の長たちてイエスに曰ひけるは、爾答ふる言なき乎。この人々の爾に立つる證據は如何に。イエス默然たり。祭司の長彼に曰ひけるは、爾キリスト神の子なるか、我なんちを活ける神に誓はせて之れを告げしめん。イエス彼に曰ひけるは、爾が言へる如し、且つわれ爾曹に告げん、此のち人の子大權の右に座し、天

の雲に乗りて来るを爾曹みるべし。是に於て祭司の長
その衣を裂きて曰ひけるは、此人は瀆すことを言へり。
何んぞ外に證據を求めんや。爾曹も今その瀆したるを
聞く、なんぢら如何に思ふ乎。かれら答へて曰ひけるは、
彼は死に當れり。是に於て彼等その面に唾きし、且つ拳に
て撃てり。或人かれをたゝき曰ひけるは、キリストよ爾
を撃つ者は誰れか、我儕に預言せよ。

第三十九章 ペテロの背信

ペテロ庭に坐り居けるに、或婢きたりて、爾もガリラヤの
イエスと偕なりと曰ひければ、ペテロ凡ての人の前に此
言を肯はずして、我なんぢが言ふ所を知らずと曰へり。
出で、門口に至れる時、また他の婢これを見て、そこに居

るものに曰ひけるは、此人もナザレのイエスと偕に在り
し。ペテロまた肯はずして誓ふ、我この人を知らずと。
暫らくありて、旁らに立ちたるもの、進み近よりて曰ひけ
るは、誠に爾も其黨の一人なり、そはなんぢの國訛りなん
ぢを顯はせり。此に於てペテロ言ひ且つ誓つて、我この
人を知らずと曰ひしが、頓て鶏鳴きぬ。ペテロ、イエスの
雞なかざる前になんぢ三度われを知らずと云はんと云
ひたまへる言を憶ひ起し、外に出で、悲しみ哭けり。

第四十章 ピラトの法廷

人々イエスを曳きて、カヤパより公廳に行けり。時すで
に夜明けなりき。彼等汚れを受けんことを恐れて、公廳
に入らず。そは踰越の節筵を食せんとすれば也。ピラ

ト出で、彼等に曰ひけるは、如何なる訟をもて斯人を訟ふるや。人々こたへけるは、彼もし悪を行へる者に非ずば、爾にわたさじ。ピラト彼等に曰ひけるは、爾曹之れを取り、爾曹の律法に従ひて審判せよ。ユダヤの人々かれに曰ひけるは、我儕に人を殺すの權なし。是れイエスの其死せんとする状を指して語れることに應せり。ピラトまた公廳に入り、イエスを召て曰ひけるは、爾はユダヤ人の王なるや。イエス彼に答へけるは、爾この事を言へるは自己に由るか、我に就て人の告げしに由るか。ピラト答へけるは、我はユダヤ人ならんや、爾の國の民と祭司の長と爾をわれにわたせり。爾なにを爲し、や。イエス答へけるは、我國はこの世の國に非ず、若しわが國この

世の國ならば、我僕われをユダヤ人にわたさざる爲めに戦ふべし。然れど我國は此世の國ならざる也。ピラト彼に曰ひけるは、然らば爾は王なるか。イエス答へけるは、爾の言ふところの如く、我は王なり。我これが爲めに生れ、これが爲めに世に來れり。そは眞理について證を爲さんため也。すべて眞理につく者は、我聲を聞く。ピラト彼に曰ひけるは、眞理は如何なるものぞ。此事を言へる後、また出で、ユダヤ人に曰ひけるは、我は斯人に罪あるを見ず。爰に爾曹に一の例あり。我踰越の節に一人の囚人を、爾曹に釋するす。爾曹ユダヤ人の王を釋さん事を欲ふや。衆人また叫びいひけるは、斯人にあらずば、バラバを許せ、バラバは盜賊なる也。ピラト祭司の長等と人

々に曰ひけるは、われ此人に於て罪あるを見ず。彼等ますます云ひはりけるは、彼はガリシヤより始めて遍ねくユダヤを教へ、此所まで來りて、民を亂せり。ピラト、ガリラヤと聞きて、此人はガリラヤ人なる乎を問ひ、其へロデの所管なるを知りて、之れをへロデに遣れり。

第四十一章 へロデの審判

此時へロデもエルサレムに在りしが、イエスを見て甚だ喜べり。そは様々なる彼が風聲を聞き、久しく之れを見んことを願ひ、且つその奇異なる事を見んと望み、たれば也。是故に多くの言を以て問ひけれども、イエス何を答へざりき。祭司の長學者たち、側に立ちて、切りに彼を訴へぬ。へロデその士卒と共に彼を蔑視嘲弄して

華はしき衣を着せ、復ピラトに遣れり。ピラトとへロデ先には仇たりしが、此日たがひに親みをなせり。

第四十二章 再びピラトの法廷

ピラト審判の座に坐りたる時、其妻云ひ遣はしけるは、此義しき人に爾かゝはる勿れ。そはわれ今日夢の中に、彼につき多く憂へたり。祭司の長、長老等、バラバを釋し、イエスを殺さんことを願へど、民に唆む。ピラト彼等に曰ひけるは、二人のうち孰れを我が爾曹に釋さんことを望むや。彼等、バラバと答ふ。ピラト曰ひけるは、然らばキリストと稱ふるイエスに我なにをなすべきか。皆いふしや。十字架につけよと。ピラトいひけるは、彼何の惡事を行しや。彼等ます／＼叫びて、十字架につけよと曰ふ。ピ

ラトその言の益なくして唯亂の起らんとするを知り、水
を取りて人々の前に手をあらひ曰ひけるは、此義しき者
の血に我は罪なし。爾曹自ら之れに當れ。民みな答へ
て曰ひけるは、其血は我儕と我儕の子孫に係はるべし。
是に於てバラバを彼等に釋るし、イエスを鞭ちて之れを
十字架につけん爲めにわたせり。ピラト部下の兵卒イ
エスを携へ、公廳に至り、全營を其もとに集め、彼の衣を褫
ぎて絳色の上衣を着せ、棘にて冕を編み、その首に冠らし
め、又葦を右手に持たせ、且つ其前に跪つき、嘲弄して曰ひ
けるは、ユダヤ人の王安かれ。また彼に唾きし其葦を取
りて、其首を撃てり。嘲弄し畢りて、其上衣をはぎ、もとの
衣をさせ、十字架につけんとして、彼を曳きゆく。

第四十三章

ユダの最後

是に於てイエスをわたししユダ、彼の死に定められしを
見て悔み、其銀三十を祭司の長老等に返して曰ひける
は、無辜の血をわたして我は罪を犯しぬ。彼等いひける
は、我儕に於て何んぞ與らん乎。爾みづから當るべし。
ユダ其銀を殿に投げ棄て、其處を去り、ゆきて自ら縊れ
たり。祭司の長等この銀を取りて曰ひけるは、此は血の
價なれば、賽錢の箱に入るべからずとて、共に謀り、この銀
をもて旅人を葬る爲めに陶工の田を買へり。故に此田
は今に至るまで、血の田と稱せらる。

第四十四章

十字架

彼等イエスを曳き往くとき、田舎より出で來れるクレネ

のシモンと云へる者を執らへ、其れに十字架を負はせて、
イエスに從はせたり。衆の民および婦等も從ふ。婦等
は彼を哭き哀めり。イエス彼等を顧みていひけるは、エ
ルサレムの女等よ、わが爲めに哭く勿れ、惟おのれと己が
子の爲めに哭け。
又他に二人の罪人を、イエスと偕に死罪に行はんとて曳
き往けり。彼等ゴルゴタと云へる所に至りて、此所にイ
エス及び罪人を十字架につけぬ。一人をイエスの右、一
人を左に置く。イエス曰ひけるは、父よ、彼等を赦し給へ、
其爲す所を知らざるが故なり。彼等闇をしてイエスの
衣服を分つ。人々立つてイエスを見たり。有司も亦嘲
哂ふて曰ひけるは、彼は他人を救へり。若しキリスト神

の選びたる者ならば自己を救ふべし。兵卒も亦かれを
嘲弄し、來り酢を予へて、爾もしユダヤ人の王ならば、自己
を救へと曰へり。又ギリシヤ、ロマ、ヘブルの文字にて此
はユダヤ人の王なりと書ける罪標を其上に建てたり。
懸けられたる罪人の一人、イエスを譏りて曰ひけるは、爾
もしキリストならど、己と我儕を救へ。他の一人彼を責
め曰ひけるは、爾おなじく審判を受けながら、神を畏れざ
る乎。我儕は當然なり。行ひしことの報を受くるなれ
ど、此人は何も善からぬ事は行はざりし也。斯くてイエ
スに曰ひけるは、主よ、御國に至らん時、我を憶ひ給へ。イ
エス答へけるは、誠に我なんちに告げん。今日なんちは
我と偕に樂園に在るべし。

イエスの母と母の姉妹およびクロパの妻のマリア並びにマグダラのマリアその十字架の傍らに立てり。イエス母と愛する所の弟子と傍らに立てるを見て母に曰ひけるは、婦よ此れなんちの子なり。また弟子に曰ひけるは、此れなんちの母あり。是時その弟子かれを己の家につれ往けり。時大凡そ十二時ごろより三時に至るまで、遍く地の上空暗黒となれり。三時ごろイエス大聲に、エリ、エリ、マサバクタニと呼ばりぬ。之れを釋けば、わが神なんぞ我をすて給ふやと云へる也。傍らに立ちたる者のうち或人これを聞きて彼はエリヤを呼べる也と曰ふ。その中の一人直ちに走り行き海絨をとり醋を含くませ、之れを葦につけて、イエスに飲ましむ。餘人曰ひけ

るは俟て、エリヤ來りて彼を救ふや否や試むべし。イエスマまた大聲に呼はり、曰ひけるは、父よ我が靈を爾の手に託す。如此いひて氣絶ゆ。殿の幔上より下まで裂けて二となり。又地ふるひ磐さけ墓ひらけて寝ねたる聖徒の身おほく甦り、イエスの甦れる後、墓を出て聖城に入りおほくの人に現はれたり。百人の長と偕にイエスを守りたるもの、地震および其有りし事を見て、甚しく懼れ、此は誠に神の子なりと曰へり。此處に遙かに望みたる多くの婦ありけり。彼はガリラヤよりイエスに従ひ事へし者等なり。其中に居りし者は、マグダラのマリアとヤコブ、ヨセフの母なるマリアと

第四十五章 埋葬

ゼベダイの子等の母と也。

日くれてイエスの弟子なるヨセフと云へるアリマタヤの富人きたりて、ピラトに往き、イエスの屍を請ひしかば、ピラトその屍をわたせと命ず。ヨセフ屍を取りて潔き布につゝみ、之れを磐にほりたる己が新しき墓におき、大なる石を墓の門に轉して去る。マダグラのマリアと他のマリアと墓に向ひて坐し、其處に居れり。

第四十六章 墓地の守護

豫備日の翌日、祭司の長とパリサイの人等、ピラトの集ひ來り曰ひけるは、主よ我儕憶ひ起せり。彼の欺偽者いきて在りし時、三日の後、甦らんと言へり。此故に命じて三日に至るまで墓を固く守らしめよ。恐らくは其

弟子夜きたりて、之れを竊み、死より甦りたりと民に言はん。然らば後の惑は先よりも愈勝るべし。ピラト彼等に曰ひけるは、番卒は爾曹にあり、往きて意のまゝに守らしめよ。是に於て彼等ゆきて石に封印し、番卒をして墓を守らしめたり。

第四十七章 復活

安息日終りてのち、七日の前の日黎明に、ガリラヤよりイエスと偕に來りし婦たち備へ置きたる香料を持ちて墓に來りしに、大なる地震ありて、主の使者、天より降り、墓の門より石を轉し、其上に坐す。その容貌は閃電のごとく、其衣は雪のごとく白し。番卒かれを懼れ、戦き死せる者の如くなりぬ。天使曰ひけるは、爾曹何ぞ死にたるもの

中なかに生いきたる者ものを尋たづぬるや。彼かれは此こゝにあらず、甦よみがへりた
り。彼かれガリヤガリヤに在ありし時とき、爾曹なんぢらに語かたりて、人ひとの子こは必ず
罪つみある人ひとの手てにわたされ、十字架ごうじあにつけられ、三日目さんじつめに甦
る可べしと云いひたりしを憶おもひ起おこせよ。彼等かれらその言ことばを憶おもひ
いで、墓はかより歸かへりて、此等こゝらの事ことをみな十一じゅういちの弟子でしと、他の弟
子等こゝらに告つぐ。

第四十八章 マリア主を觀る

マリアは墓はかの外そとに立たちて、哭なげきつゝ、墓はかに向むかひかゝみて、二
人ふたりの天使てんし白しろき衣いを着き、イエスの屍かばねを置おきたりし所の首くびの
方かたに一人ひとり、足の方あしのかたに一人ひとり坐まし居ゐるを見みたり。天あまの使つかかれ
に曰いはひけるは、婦つまよ何なんぞ哭なげくや。彼かれこたへけるは、我主われのみを
取とりし者ものあり、何處どこに置おきしかを知らざれば也なり。如此かくい

ひてふり反かへりイエスの立たてるを見みる。然しかれどイエスな
ることを知しらず。イエス彼かれに曰いはひけるは、婦つまよ何なんぞ哭なげく
や、誰たれを尋たづぬるか。マリア園うゑんを守まもる人ひとならんと意いひ、彼かれに
曰いはひけるは、君きみよ爾なんぢもし彼かれを他ほかに移うつし、ならば、何處どこに置お
きしか我われに告つげよ。我われこれを取とるべし。イエス彼かれにマ
リアよといふ。婦つまかへりみて、彼かれにラボニと曰いはへり。之これ
れを譯とけば、夫子うしなり。イエス彼かれに曰いはひけるは、我われに觸ふる
こと勿なれ。我われいまだ我父わがちちに昇のぼらざれば也なり。わが兄弟あにに
往ゆきていへ、我われは我父わがちち即すなはち爾曹なんぢらが父ちち、わが神かみ即すなはち爾曹なんぢらが神かみ
に昇のぼると。マгдаラのマリア主しゆを見みしことと、主しゆの如此かく
おのれに言いひ給たまへるといふ事ことを、弟子等でしらに往ゆきて告つぐ。

第四十九章

番卒の報告

婦の去りし祭司の長等に告げしかば、彼等と長老あつまりて、偕に議り、多くの銀子を兵卒に與へて曰ひけるは、爾曹いへ、我儕が寝ねたる時、その弟子夜きたりて、彼を竊めり。此事もし君侯に聞ゆるとも、我等かれに勸めて、爾曹に後難なからしめん。かれら銀子を取りて、言ひ含められし如くしたり。是に於て此の如き話、今日に至るまで、エダヤ人の中に傳播せり。

第五十章

エマオの途上

一日二人の弟子エルサレムより三里ばかり隔りたる、エマオと云へる村に往きけるに、互に此等のありし事ども

を語りあへり。語り論ずる時に、イエス自ら近きて偕に行けり。然れど、彼等の目迷ひて知ることを得ざりき。イエス曰ひけるは、爾曹歩みつゝ、互に哀しみ語り合ふことは何ぞ乎。その一人のクレオバと云へるもの答へけるは、爾はエルサレムの旅人にして、獨り此頃ありし事を知らざる乎。答へけるは何事ぞや。之れに曰ひけるは、ナザレのイエスの事なり。此人は神と萬民の前に於て、行と云に大なる能力ある預言者なりしが、祭司の長と有司等かれを死罪にわたして、十字架につけたり。我儕イストラエルを贖はん者は此人なりと望みたりし。又それ而已ならず、此等の事の成りしより、今日は三日目なるに我儕の中なる或婦等、我儕を驚かせり。彼等朝はやく墓

に往き、その屍を見ずして來り、天使あらはれて、彼は甦りたりと云へるを見たりと告ぐ。また我儕と偕に在りし者も、墓にゆきたるに婦の言へる如くにて、且つ彼を見ざりき。イエス曰ひけるは、預言者の凡て言ひたる事を信する心の遅き愚かなるものよ。キリストは此等の難を受け、其榮光に入るべきにあらずや。故にモーゼより凡ての預言者を始め、すべての聖書に於て己に就ての事は解き明されたり。彼等ゆく所の村に近きけるに、彼ゆき過ぎんとする状をなせば、彼等勸め曰ひけるは、日傾きて暮に及びぬ、我儕と偕に止まれ。彼いりて止まる。共に食に就ける時、パンを取り謝してさき、彼等に與へければ、二人の者の目瞭かになりて、彼を識れり。又忽ち其

目に見えずなれり。彼等たがひに曰ひけるは、途にて我儕と語りかつ聖書を解き開けるとき、われらが心熱せしにあらずや。此時彼等起てエルサレムに歸り、十一の弟子および偕なる人々の集まり居るに遇ふ。その人等の曰ひけるは、主實に甦りシモンに現はれたり。二人の者も途上にてありしことパンをさき給へるに因りて識りたる事を語れり。

第五十一章 使徒に現はる

一週之首の日弟子等エダヤ人を懼るゝに因りて、集まれる所の門を閉ぢ置きしが、イエス來りて其中に立ち、彼等に曰ひけるは、爾曹安かれ。如此いひし後、其手と脅を彼等に見す。弟子等を見て喜べり。イエスまた彼等に曰

遣はさるは爾曹安かれ父の我を遣はし、如く我も爾曹を
は、聖靈を受けよ。如此いひしのうち誰の罪を釋すとも、其罪ゆる
され誰の罪を定むるとも、其罪さだめらるべし。
イエス來りしと十二の弟子の一人なる、テドモと稱へる
トマス彼等と偕に在らざりき。是故に他の弟子かれに
曰ひけるは、我儕主を見たり。トマス彼等に曰ひけるは
我もし其手に釘の跡を見わが指を釘の跡にさしわが手
を其脅にさすに非ずば信せじ。八日を過ぎし後、また弟
子等室の内に在りけるが、トマスも彼等と偕に在れり。
門は閉ぢたるにイエス來りて其中に立ちて曰ひけるは
爾曹安かれ。遂にトマスに曰ひけるは、爾の指を此に伸

べて我手を見、なんぢの手を伸べて我脅にさせ、信せざる
勿れ信せよ。トマス答へて曰ひけるは、我主よ、我神よ。
イエス彼に曰ひけるは、爾われを見しに因りて信ず、見ず
して信するものは福なり。

第五十二章 テベリヤ湖畔

此後イエスマタテベリヤの湖にて、弟子等に己を現せり。
其現はせる事左の如し。シモン、ペテロとテドモと云へ
るトマス及びガラヤのカナのナタナエルとゼベダイ
の子等また他の二人の弟子ともに在り、シモン、ペテロ彼
等に曰ひけるは、我漁りに行かん。彼等いひけるは、我儕
も偕に往かん。已に夜も明けたるに、イエス岸に立てり。
獲も無りき。

然れど弟子等そのイエスなる事を知らず。イエス彼等に曰ひけるは、小子ども食物あるや。彼等答へけるは、無し。イエス彼等に曰ひけるは、網を舟の右にうたば所獲あらん。遂に網をうつ魚おほきに因りて曳き上ぐる事能はず。是に於てイエスの愛せし所の彼の弟子ペテロに曰ひけるは、是れ主なり。シモン、ペテロ主なりと聞きて裸體なりしが、衣をつけ帶して湖に飛び入りぬ。他の弟子等は小舟にて魚の入りたる網を曳きて至れり。その岸を去ること遠からず、五十間ばかりなりければ也。岸に着きしに、炭火と其上に載せたる魚およびパンあるを見たり。イエス彼等に曰ひけるは、今捕へし所の魚を少し持ち來れ、シモン、ペテロ舟にゆき、網を岸に曳き來り

しに、其網の中に大なる魚百五十三尾いたり。如此おほかりければ、網は裂れざりき。イエス彼等に曰ひけるは、來りて食せよ。弟子たち敢て彼に爾は誰なると問ふことをせず。此は主なりと知れば也。イエス來りてパンを取り、彼等に予ふ、魚をも亦之の如くせり。偕て彼等食して後、イエス、シモンに曰ひけるは、ヨナの子シモンよ、爾これらにまさりて我を愛するや。彼いひけるは、主よ、然り、わが爾を愛することば、爾知れり。イエス彼に曰ひけるは、我羔を牧へ。また二次かれに曰ひけるは、ヨナの子シモンよ、我を愛する乎。かれ曰ひけるは、主よ、然り、わが爾を愛すことば、爾知れり。イエス彼に曰ひけるは、我羔を牧へ。三次かれに曰ひけるは、ヨナの子シ

モンよ我を愛する乎。ペテロ三次われを愛する乎と言はれしに因りて憂ふ。斯くて答へけるは主知らざる所なし。我なんぢを愛することば爾知れり。イエス彼に曰ひけるは、我羔を牧へ。誠に實に爾に告げん、爾いとけなき時みづから帶し、意に任せて遊び行きぬ。老ては手を伸べて人爾をくゝり、意に欲する所に曳き至らん。如此いへるは其如何なる死にて神を榮めんといふ事を示したる也。此を言ひて後、又彼に曰ひけるは、我に從へ。ペテロふりかへりて、イエスの愛せし弟子の從へるを見る。ペテロ之れを見て、イエスに曰ひけるは、主よ斯人いかに、イエス彼に曰ひけるは、我もし彼が生存して我が來るを待つを欲は、爾に何の關りあらんや。爾は我に來るを待つを欲は、爾に何の關りあらんやと言ひし也。

從へ。是に於て此言兄弟の中に傳はりて、此弟子死すと言へり。然れどイエス、ペテロに彼は死すと言しにあらす。我もし彼が生存して我が來るを待つを欲は、爾に何の關りあらんやと言ひし也。

第五十三章 昇天

十一の弟子ガリラヤに往きて、イエスの彼等に命せし所の山に至り、イエスを見て拜せり。然れど疑へる者もありき。イエス進みて彼等に語りいひけるは、天のうち地の上の凡ての權を我に賜はれり。是故に爾曹ゆきて萬國の民にバプテスマを施し、之れを父と子と聖靈の名に入れて弟子とし、且つわが凡て爾曹に命せし言を守れと彼等に教へよ。夫れ我は世の末まで常に爾曹と偕に

在るなり。
 斯くて主は彼等に語りし後、天に擧げられ、神の右に坐し
 ぬ。弟子等徧ねく福音を宣べ傳ふ。主も亦かれらに力
 を協せ、其從ふ所の奇跡によりて道を堅ふしたまへり。
 アーメン

新撰基督傳終

大正四年八月十八日印刷
 大正四年八月廿一日發行

定價拾五錢

著者

安部清藏

發行者

福永文之助

印刷者

村岡平吉

印刷所

東京市京橋區銀座四丁目一番地
 福音印刷合資會社東京支店

發行所

東京市京橋區足張町二丁目
 警醒社書店

振替東京五五三(電話新橋一五八七)

不許複製

安部清藏述

馬太傳講義

定價一圓

再版發行

278
278

栗ノイマン
原基原著
譯

□ 耶蘇傳

定價八
郵稅八十
錢錢

柏ニ
井コ
ル博
園士
譯著

□ 基督傳

定價七
郵稅八十
錢錢

田リ
中一
ス達
原譯
著

□ 耶蘇基督傳

定價一
郵稅十一
圓卅
錢錢

大宮季貞編

□ 聖書基督傳

定價五
郵稅八十
錢錢

山田寅之助著

□ 基督傳

定價二
郵稅十六
圓廿五
錢錢

終

